

Title	金葉和歌集二度本攷(一) : 所謂続群書類従初度本系に就いて
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1968
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.7 (1968.) ,p.63- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000007-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

金葉和歌集二度本攷（一）

所謂統群書類従初度本系に就いて

平 澤 五 郎

天治元年、白河院御讓位の末宣旨を奉り、撰者源俊賴によつて撰進せられた金葉和歌集は、勅撰集のなかにあつては奇異な感さえ残す、激しい撰述過程を僅か数年の間に数度にわたつて経ることとなるのである。初奏本金葉和歌集の奏覧は、猶その成立の期日を明らかにしないが、天治元年極月廿日以後、翌年にかけて頃を従来想定されてい^{註一}る。この初奏本は古く今鏡^{註二}・増鏡^{註三}などの史書や、袋草子^{註四}・八雲御抄等の歌論書、或いは三奏本金葉和歌集奥書^{註六}などに散見する記載によつて、その概略が識られるにすぎなかつた。が近時、初奏本と認められる伝本として、静嘉堂文庫蔵本に、伝冷泉為相筆零本（巻五迄）一本の伝存が松田武夫博士の調査により紹介せられた。^{註七}その後、影印本等の上梓されるにおよんで、初奏本前半部については、ほぼ全貌を明らかにされるに至つた。しかし、猶註記した如く、上掲諸本の記事に於ける巻頭歌の相違、三宮輔仁親王の御名表記に関する問題など、以後に残すものがあるが、一応、この静嘉堂本を以て初度本、尠くともそれに準ずる伝本と認め得るものと思われる。従つて、以下初度本と称するも

のは、このほかに伝存本がない現在、当然の事ながら本書を指すわけである。

今鏡、例の「武蔵野の草」の巻は、本書撰述に於ける、あの著しい変遷の事情の一半をかなり具体的に伝えている。即ち

俊頼の君、金葉集撰びて奉りたりける始めに、貫之「春立つ事を春日野の」といふ歌、その次に覺雅法師とて入り給へりけるを「貫之もめでたしといひながら、三代集に漏れきて、あまり古びたる。覺雅法師も、げにともつゞき覚えす」など仰せられければ、古き上手ども入るまじかりけり。またいとしもなく思し召す人除くべかりけりとて、御覚えの人をのみ採り入れて

……

とある。この著明な一例でも判るように、白河院一流の独專的な機嫌が従来の撰集方法を一変させるに充分な理由ともなったのであろう。撰者俊頼にすれば、尊旨を忖度し、御意向を遵奉することは、また或る点、勅撰集編纂の旧套を破る彼本来の独自性を完全に發揮し得るまたとない機会でもあったかとも想像される。そして此処に、二度本第一次草案として成ったものに、所謂統群書類従系初度本の段階があつたのである。「古き上手ども」の歌はすべて切出され、仮令、「御覚えの人をのみ採り入れ」ることを余儀なくされても、代るに「近代ノ人歌等」を以てするの一面には彼の革新的な撰集態度が、また、そこに開けてゆくわけでもあつたのであろう。

扱、本稿は伝存する二度本諸本の基礎的な調査を基とし、その資料より撰述過程を迎えることを目的とする仕事の一環として、まず、この系類―初度本から二度本へと激しく揺れ動く最初の一系類―から当初の目標に沿ってはじめることとする。

(一) 続群書類従初度本系諸本

現存諸本を類別し、次に誌すと

(イ) (1) 伝鳥丸光広筆本

内藤久寛氏蔵

(2) 押小路家旧蔵本

松田武夫氏旧蔵

(3) 園林文庫本（八代集之内）

書陵部蔵

(4) 岡田本

岡田真氏旧蔵本

(ロ) (1) 中御門宣秀筆本

九州大学図書館蔵

(2) 続群書類従初度本

(ハ) 橋本公夏筆本

正宗文庫旧蔵

同天文四年筆写本

右同

等が現在識られる諸本である。右の諸本のうち、伝光広筆本・押小路家旧蔵本は現在所在不明である。又、岡田本には正宗甫一氏の臨写本がある。猶この系統の伝本は比較的少ないが猶残存する可能性はあろう。未見のものに加えて今後の調査を待ちたい。以下、各本の解題を記するのであるが、従来諸氏の研究を併せ参照しながら集約し、概要することにした。

○統群書類従初度本

本書は、統群書類従第十四輯上和歌部（卷第三百六十七）に初度本金葉和歌集と仮称され所載し、この系類の中では最も早くから世に知られた伝本であるが、この初度本の呼称の明らかに誤りであることは、つとに井上通泰博士等そのほか諸氏の詳述するところである。

さて、本書は次の奥書を持つ。即ち

前左京大夫源朝臣俊頼依 白川法皇御氣色撰之。密奏之後背御氣色。三ヶ度撰改。有簾細両之本云々。

天治元年奏之。大治元二之間奏聞之。

此和歌集者中御門宣胤卿息黃門宣秀手跡也。奥書等珍重本也。歌数聊多世流布本。可秘函底而已

慶長十四年秋季上澣

光広花押

とある。右の奥書よりすれば、中御門卿宣秀筆写本に、烏丸光広がその奥を誌した本に依って、この統群書類従本は上梓されたことになるが、後述するように、この中御門宣秀筆本が現存し、本書と比較するに、本書は次に誌す如く、著しい脱漏が見出され、かつ、両書の間には猶比較的勘いとは云え異同が存することから、この宣秀本から直接転写されたものでないことは諸氏のすでに論述されたところである。この奥書は転写の過程に殆どそのまま跡をとどめたものであろう。

以下本書に註記された、「以下闕」「端闕」「歌闕」等の部分をあげておく。脱漏箇処の歌員数は親本である中御門

宣秀本を以て数えることにする。

卷二末近くに、源俊頼朝臣歌「山のはを玉えの水にうつしもて月をは浪の下に待かな」とあり、次歌の作者は藤原基俊であるが、この作者名まであつて「以下闕」となっている。宣秀本は、基俊歌「夏の夜の云々」、源有政歌「みそきする云々」、中納言顕隆歌「みそきする云々」、藤原季通歌「けふくれは云々」の四首がある。続いて卷三巻頭歌も三首欠脱している。即ち春宮大夫公実歌「とことには云々」、太宰大式長実歌「まくすはふ云々」、皇后宮美濃「ふちはかま云々」である。

卷三では、右兵衛督伊通歌「稲葉ふく風の音せぬ宿ならは何につけてか秋をしらまし」の次に「題闕」とあるが、宣秀本には以下七首が見出せる。即ち、藤原行盛歌「山ふかみ云々」、大納言経信歌「夕されは云々」、大江公資歌「山のはに云々」、藤原忠隆歌「風ふけは云々」、大納言経信歌「月かけの云々」、法橋忠命歌「草枕この旅ねにそ云々」、顕仲卿女「もろともに云々」である。

また同卷中頃に、「長経のかつらの山庄にて閑見月といへることを 大納言経信」と詞書・作者名あり、この後に、「歌闕」とあつて、宣秀本に比し八首の脱漏が見出される。即ち、経信歌「こよひわか云々」、藤原有業歌「たひねする云々」、春宮大夫公実歌「くもりなき云々」、皇后宮摂津歌「てる月の云々」、源俊頼歌「山のはに云々」、摂政左大臣歌「あしねはひ云々」、一宮紀伊歌「鏡山云々」、参議師頼歌「いにしへの云々」である。

卷八にも、同様な著しい欠落が見出される。巻頭近き処、藤原仲実の歌「よとゝもに袖のかはかぬ我恋やとしまか磯にかゝる白なみ」の次に宣秀本には七首がある。「歌闕」等の註記は無いが続群書類従本の脱漏と明らかに識られる。宣秀本は次の如くである。中納言雅定歌「あふことの云々」、右兵衛督伊通歌「山の井の云々」、太宰大式長実

「みちのくの云々」、権僧正永縁歌「おもはんと云々」、隆源法師歌「くるゝまも云々」、前中宮越後歌「人心云々」、修理大夫顯季「わきもこか云々」等である。更に統類従本は次歌の詞書の前半部「われをはかれゝになりてこと人のかりまかると」は流布本に依って補入していることを断わっている。

また巻八には、もう一ヶ処、「もらさはやはそ谷川の埋水影たに見えぬ恋にしつむと」の次に、読人不知の歌「君こそは云々」、藤原顕輔歌「あつき弓云々」の二首を欠いているが、これも前者同様、註記はない。

巻十、連歌の部に、律師慶暹の「むめのはなかさきたるみのむし」以下、連歌四聯を欠漏する。即ち、よみ人しらす「よるおとすなり云々」、頼算法師「あらふとみれは云々」、なりみつ「おくなるをもや云々」の唱和である。猶、又俊頼の巻末歌は詞書・作者名をすべて省略しているのが目立つところである。

歌数も従って祖本とみられる中御門宣秀本よりかなり尠く、参考までに次に記すと、巻一春部 一一八首、巻二夏部 八〇首、巻三秋部 一一〇首、巻四冬部 六〇首、巻五賀部 二九首、巻六別離部 一七首、巻七恋部上 七一首、巻八恋部下 八七首、巻九雑部上 八八首、巻十雑部下 四八首、連歌 一五首、巻末歌一首、総歌数七二四首である。

右の如く本書の脱漏は極めて著しい。が後述するように、この系類に於ては右の脱漏を除けば二本―宣秀本と本書―は他本に較べ異同は尠く、歌順など全く一致するところなどをみても、本書は同系上の一転写本とみられる。恐らく宣秀本から統群書類従本に至る過程には何度かの転写を経たものと想像され、右の欠落部分を生じたり、又、両本間にまま散見される語彙の異同、イ本校合の跡の相違などが点在する結果となったものかと思われるのである。

○中御門宣秀筆本

本書は九州大学図書館所蔵の宇土侯細川家旧蔵本中の一冊である。昭和二十六年「語文研究」創刊号（九州大学国文学会）に新資料の一つとして石井和男氏によって詳細に紹介され、待望久しかった続群書類従初度本の祖本が世に識られたのである。その後、写真の複製は入手していたが、直接本書披見の機会がなく、書誌上の調査を怠っていた。昭和四十一年、西日本国語国文学会翻刻双書刊行会から、目加田さくを氏によって翻刻され、本書の全貌は更に明瞭となった。二氏の論述、写真を参照しながら以下簡略に解題しておく。

胡蝶装一冊。金欄表紙、豎二四・一糎、横一七糎。題簽なし。料紙、鳥の子。墨付百十五葉。白紙一葉。本文は第二葉目裏より始まり、第一行に「金葉和歌集第一」とあり、次行「春部」とある。本文は毎半葉十行。詞書・作者・歌を別行とし、三首乃至五首を筆写する。また本文中に、まゝ異本との校合書入が施されていて、続群書類従本のイ本書入とも若干の相違が見出される。

桐箱の蓋中央に「金葉 中御門宣秀筆」と墨書するほかに、蓋裏に極札二葉が貼付されていて、それぞれ「金葉集中御門宣秀卿
奥書鳥丸垂機光広卿 牛庵」、「中御門殿宣秀卿金葉和歌集一冊
奥書鳥丸殿光広卿有名判 山琴」とある。更に書付が一葉貼付され、それには、「右牛庵了珉極札 赤嶋アハセふくさ上包／紙数百拾六枚内白紙一枚 秤目七拾五匁／宮ノ書付 滝本坊法印昭乗筆」とあるが、「赤嶋アハセふくさ上包」は見当たらない由誌されている。

また、箱の底には、弘賢と記名する添状が一葉ある。即ち

此金葉集初度奏覧／の本と相候可候板本／にも合不申候三度之本／とも相違仕世間比類／無之候上鳥丸光広／卿奥書珍重御座

とある。これは本書が流布本（正保版・八代集抄等）とも三奏本とも著しく異同するところから、弘賢はこれを初度本かと推したものと思われる。いずれにせよ、初度本、或はこの続群書類従の所謂初度本は世間比類無きものであったことが判る。その故に烏丸光広が奥を更に誌した、と弘賢は記している。この添状の筆者については石井和男氏は「筆跡署名その他から屋代弘賢の筆であると考へられる」と述べている。

さて、この奥書は、まず本文と同筆と認められるものと、烏丸光広筆のとの二種ある。まず前者には、

前左京大夫源朝臣俊頼依 白川／法皇御気色撰之密奏之後背御／気色三ヶ度撰改有麤細両三本云々／天治元年奉之大治元二之間奏聞之

とある。右の奥書は続群書類従本のそれと酷似するが、本書の「両三本」を「両之本」と誤り、「天治元年奉之」が「天治元年奏之」と書き誤っている。また、目加田氏は「麤細の草体と想われる偽を続類従本は簾に誤まり」と述べられている。「麤細」であれば、よく意は通ずるが、「簾細」では勿論意をなさないのである。この草体を麤とよみ得るか否かは猶疑問が残る。或は麤の俗体「匚」「匚」の草体がくずれたものではなからうかと思われる。また氏は右の奥書が、仁安元年の和歌現在書目録、金葉集一部十巻の条下に「前木工頭源朝臣俊頼依白川法皇御気色撰之内奏之後有御気色三ヶ度撰改有麤細両三本云々天治元年奉之大治元二之間奏之」と酷似することを指摘されている。これにも麤細とあるのは注意される。字体は「麤」であるか、「匚」「匚」であるかはともかくも、意は「麤細」であろう。この奥書の裏に、前者とは明らかに別筆で次の如く誌している。

此和歌集者中御門／宣胤卿息黄門宣秀／手跡也奥書等珍重本也／歌数聊多世流布本／可秘函底而已／慶長十四年季秋上澣

光広（花押）

さて、本書の筆写者であるが、目加田氏は九大図書館蔵細川文庫本の中にある、烏丸光広筆と推定される山家集、或は同文庫の中御門宣胤編類葉集（但し、この本は同文庫目録によると、類葉集 大十三冊 中御門宣胤編「延徳三年宣胤奥あり、江戸初葉写」とある。宣胤は大永五年に薨じているので、江戸初写とあれば宣胤自筆本ではない。）などから、「一応(B)（光広）の奥書の通り、本文及び(A)（前者の奥書）は宣秀筆、(B)は光広自筆と考えられるようである。つまり、中御門宣秀筆本に光広が奥書をしたもので、続類従本系の祖本と想われる」と述べられている。披見の機会がなく写真のみからの判断は危険を招くので氏の御見解を再記したのである。

書写年代については、両氏共に触れておられぬが、九州大学
図書館蔵「細川文庫目録」によると、「室町中期写」としている。

宣秀は、諸家伝から適録すると、文明元年八月十七日誕生、同十五年十一月九日藏人十五歳、明応四年二月九日藏人頭二十七歳、文亀四年三月二十九日權中納言三十六歳、永正十五年五月廿八日權大納言五十歳、大永五年十一月九日辞、享祿四年七月六日従一位六十三歳、そして、その年同じ月の九日に薨じている。従って書写の時代は享祿四年以前文明以後ということになるが、写本の筆勢（写真からではあるが）からみて青年期のものとも思えぬ。想像にすぎぬが、恐らく宣秀四・五十歳以後の事ではなからうか。室町時代も末期にさしかかる頃、或は時代は更に降るかもしれないかと想像されるのである。

次に、本書の各巻の歌数を誌すと、春部百十八首、夏部八十四首、秋部百二十八首、冬部六十首、賀部二十九首、別離部十七首、恋部上七十一首、恋部下九十六首、雑部上八十八首、雑部下四十八首、連歌十九首、卷末歌一首、総歌数七百五十九首である。続群書類従本に較べ、三十五首多いこととなる。この三十五首は、さきに述べた如くすべ

て続群書類従本の欠漏歌であることが認められる。石井氏はこの伝宣秀筆本が続類従本の祖本であることの動かせない証拠として、この三十五首以外には、両書の間に歌の出入・順序の前後した所を見ないと述べられ、更に、「一、歌ばかりでなく題詞や作者名の夫々について見ても、続類従本にあつて伝宣秀筆本に欠けた所は一つも見られず、伝宣秀筆本にあつて続類従本に欠けた所が四所見られること。一、本文の小さな相違を比較すると、殆んどが続類従本の誤写と考へられること。一、右の部分を、伝宣秀本について見ると、まぎらしい書体で書かれてゐるものが少なからずあること。一、伝宣秀本に明らかに誤と思はれる所を続類従本にそのまゝ写されてゐる部分が多いこと。」等を挙げられ、まことに適切な要約をなされている。また、本書と続群書類従本との細密な校異は、氏の前掲論文に詳しいことを併せ誌しておく。

○内藤久寛氏蔵伝烏丸光広筆本

先の宣秀筆本は烏丸光広が巻末に奥書を誌していたが、この光広筆と称せられる伝本が現存しており、つとに松田武夫氏の「勅撰和歌集の研究」の中で紹介されている。未見であるので、同書によって要約しておくことにする。

本書は縦八寸八分（約二六・六糎）、横六寸一分（一八・三糎）の大形胡蝶装一冊本。余白 前一丁、後二丁。墨付百十九丁。表紙は紗に金糸模様があり、左上に「金葉和歌集」の紙題簽を貼る。見返し及料紙は鳥の子。行数十行。慶長頃の書写本で、奥書がない。光広自筆の明らかな証拠はないようであるが、次の極札及び貼紙があるという。

烏丸亜槐光広卿

金葉集 卽

金葉集 一冊

烏丸光広卿正筆 ㊦

外題共一筆

明治十五年月古筆了仲翁加筆極

墨付百拾九枚 白紙三枚 ㊦

本文には所々に他筆のイ本校合のあとがあり、内容は松田氏旧藏園林文庫旧藏本・同旧藏押小路家旧藏本の「二本と全く同様で」あると述べられている。そして三本共一様に巻四に一箇処一首欠けていて、それは、

氷をよめる

源俊頼朝臣

冬月をよめる

神祇伯顯仲

冬さむみ空にこほれる月影はやとにもるこそとくる成けれ

とある処である由述べられている。氏はまた井上通泰氏の添状（大正四年十一月記）を紹介されている。その中に、
続群書類従本の光広の奥書をあげて

思ふに此本は光広が宣秀卿の本に奥を加へし時写しとゞめたるならむ。然らば其原本たるべき類従本に脱漏あるはいかにといふに、類従本の編者はおそらくは宣秀卿書写の本ならぬ伝本に拠れるにて脱漏は伝写の際に生ぜしなるべし。

と誌している。松田氏は右の文を引用されながら

と云はれる如く、続群従本は、光広が宣秀自筆本に奥書を加へたその本の転写本に多分拠つたものと考へられるのである。又この本を光広自筆とすれば宣秀自筆本を写したものと想像される可能性を有するわけである。かかる意味に於いて、宣秀本が出ない限り、この本はこの種の類本中比較的伝写の系統がはつきりする古写本なる点で、学的価値のあるものである。この

本が宣秀本の忠実な写本とすれば、宣秀本にも巻四の一首は欠けてゐるわけで、従つて、宣秀本以前の本が問題となるのである。

と、井上氏の語を受けて推論されている。宣秀筆本の未発見の当時、さきにあげた続類従本の慶長十四年の光広奥書からすれば、この伝光広本も、慶長年代の写本との事でもあり、両本の親子関係の可能性を推論されたのは当然の帰結であつたにちがいない。特に続類従本と宣秀卿筆写本との間に於ける両氏の推論は現在猶動かぬところであるが、宣秀筆写本発見後、この伝光広筆本と宣秀筆写本との間には「此本は光広が宣秀卿書写の本に奥を加へし時写しとぞめた」ものと想定された井上氏の御推論も、又「光広自筆とすれば宣秀自筆本を写したものと想像される可能性」は遺憾ながら認めることの出来難い相互の相違が見出されるのである。ただ、このことも松田氏の御調査により、この伝光広筆本が園林文庫旧蔵本と「全く同様」であるという結果によつて導き出されるのである。従つて、伝光広筆本・押小路旧蔵本・園林文庫旧蔵本は一括して、其の処に於て宣秀筆写本との間を誌すこととする。尤も、さきにあげた、伝光広筆本系三本共通の巻四に於ける欠落歌一首とある処には、「氷をよめる 源俊頼朝臣」の詞書・作者名も宣秀筆本（橋本公夏筆両本にも）には存しないが、ただし岡田真氏旧蔵本には同様に、同文の詞書・作者名のみが記されている。

○松田武夫氏旧蔵押小路家本

本書も此の系類に属する伝本であり、さきの伝光広本と「内容は全く一致」（前掲書）する由、松田氏に依つて紹介された。現在、本書の所在が不明であるので、氏の御調査によつて、ここに再記しておく。

胡蝶装の一冊本。綴子表紙、縦八寸二分五厘（約二十二種）、横五寸二分（約十五・七種）。料紙、鳥の子。每半葉十行。墨付百十五丁。余白 前一丁、後二丁。奥書はないとのことである。又、過日直接お尋ねした処、書写年代は江戸中期をやや降る比較的新しい写本であるとのことである。

○書陵部藏園林文庫旧蔵本

本書も又松田氏によつて御紹介された一本である。現在書陵部に所蔵される、函架番号B 4—48の八代集一二冊のうちの一冊である。書写年代は江戸中期頃。花卉文様裂表紙、竪二四・七種、横一七種。字面高さ約十九・五種。綴葉装両面書。料紙、鳥の子。每半葉十行書きで、詞書・作者名・歌は歌書一般の書法で別行にそれぞれ排置されている。本文右傍には処タイ本との校異を誌している。また、極く尠いが、本文の誤りを、筆者が訂した処がある。例えば「沢水に螢^{ほくし}のかけのうつれるを……」と螢の誤写を「ほくし」と傍に訂しているのや、「月恋網代……」と推定している。この本も奥書を持たない。墨付一一四葉。題簽は左肩、白紙短冊に「金葉和歌集」と本文同筆で墨書する。表に遊紙一葉があり、次葉裏より本文がはじまるが、この表に「園林文庫」の長方形朱印が捺されている。松田氏が園林文庫本と称されたのも、この印記によるのであらう。

二度本の殆どが、部立に於て、春歌・夏歌・冬歌……とあるが、この本（この系類は）、春部・夏部・秋部・冬部・賀部・別離部・恋部上・恋部下・雑部上・雑部下・連歌となつていて、初度本（賀部迄であるが）と同じく「……部」とある。さて、本書の内容についてみると、伝鳥丸光広本・押小路旧蔵本と本書とは内容の上で全く一致するとされる松田氏の調査結果に従つて、この系類本中では比較的本書に近似する宣秀本との異同（細部についてはふれないが）

を次に掲げることとする。橋本公夏筆二本等との間に就いては総括して後述する。

卷一 春部

おなし心を

太宰大式長実

春ふかみ神なひ河にかけ見えてうつろひにけり山吹のはな (82) (宣秀本)、本書・岡田本欠。

紫藤蔵松といふことを

良暹法師

松風の音せさりせは藤浪をなにゝかゝれる花としらまし (88) (同書)、本書・岡田本欠。

卷二 夏部

尋郭公といへることをよめる

藤原節信

けふも又尋くらしつ郭公いかてきくへき初ねなるらむ (112) (同書)、本書・岡田本欠。

卷三 秋部

摂政左大臣家にて落葉をよめる

源俊頼朝臣

あらし山葉守の神もたゝるらん月に紅葉の手向しつれば (園林本) (266) ノ次、本書欠、岡田本あり。但しこの歌、園林本に既出「月前落葉を 源俊頼朝臣 嵐にや葉守の神のたゝるらん月にもみちの手向しつれば」(230)とあり、やゝ語句相違するも重複歌である。宣秀本にもこの(230)の歌はある。

卷四 冬部

氷をよめる

源俊頼朝臣

園林本・岡田本には右の如く歌を欠くが詞書・作者名のみある。宣秀本には勿論無い。

氷をよませ給ける

三宮

つなかねとなかれもゆかす高せ舟むすふ氷のとけぬかきりは (316) (宣秀本)、本書・岡田本欠。

卷六 別離部

返し

東宮大夫公実

朝日にも月ともわかすつかのまも君をわするゝ時しなければ (370) (同書)、本書・岡田本欠。

卷八 恋部下

題しらす

よみ人しらす

逢事は夢はかりにてやみにしをさこそ見しかと人にかたるな (474) (同書)、本書・岡田本欠。

題しらす

上総侍従

あさましや涙にうかふ我身かな心かくはおもはさりしを (495) (同書)、本書・岡田本欠。

〔題しらす〕

〔よみ人しらす〕

うとましや木の下かけの忘水いくらの人のかけをみるらむ (531) (同書)、本書・岡田本欠。

恋歌とてよめる

春宮大夫公実

あふことは舟人よはみ漕舟のみをさかのほる心ちこそすれ (544) (同書)、本書・岡田本欠。

卷九 雑上

御返し

上東門院

過にける月日のかすもしられつゝこの身をみるもあはれなる哉 (599) (同書)、本書・岡田本欠。

殿上をりたりける比人の殿上しけるをみてよめる

源行宗朝臣

うらやまし雲のかけはし立かへり二たひのほるみちをしらはや (606) (同書)、本書・岡田本欠。

殿上申けるにせさせさりければよめる

平忠盛朝臣

思きや雲ゐの月をよそにみて心のやみにまとふへしとは (607) (同書)、本書・岡田本欠。

皇后宮美濃

夜なくはまところまでのみ有明のつきせず物を思ころかな (621) (本書・岡田本あり)、宣秀本欠。

卷十 雑下

衆罪如霜露といへる事をよめる

覺誓法師

つみは霜露ものころ〇消ぬらむなき夜すからくゆる思ひに (675) (宣秀本)、本書・岡田本欠。

龍女成仏をよめる

勝紹〔超〕法師

わたつ海の底のみくつとみし物をいかてか空の月とみるらむ (679) (同書)、本書・岡田本欠。

極樂をおもふといへることを

源師俊朝臣

四方の海の波にたゞよふみくつをもなるへのなみにひきなもらしそ (686) (本書・岡田本あり)、宣秀本欠。

醍醐桜会に花のちるをみてよめる

珍海法師母

けふもなをおしみやせまし法のためちらす花そと思なさすは (687) (同書)、本書・岡田本欠。

又、連歌の部に、本書は一箇処書落しがある。即ち

鳥をのきにさしたりけるかよる雨にぬれけるを見て

かさゝきならはかゝらましやは（706）

とあるが、宣秀本他皆、前に

よみ人しらす

雨ふれはきしもしとゝになりにつり

あるものゝ（宣秀本）

とある。岡田本も本書と同じく欠落する。

次に、本書の明らかな誤写がある。冬部に

摂政左大臣家にて冬題ともを搜てよみけるに歳暮をとりてよめる

藤原永実

かそふるに残りすくなき身にしあれはせめても惜きとしの暮哉

この哥よみて年のうちにまかりけるとて歳暮の心をよみ給ける

三宮

いかにせん暮行年をしるへにて身を尋ねつゝ老はきにけり

とあるが、これは永実の歌の左註と三宮の歌の詞書とが「……とて」として続け、混入して書写されているのである。本来は「……とそ」で終るべきものである。

〔一〕（）圈内に参考までに記したのは国歌大観番号である。流布本に欠く歌は〔一〕ノ次〕のように記し、該当歌の歌順を示したものである〕

右の如く本書（伝光広本・押小路家旧蔵本をも含む）は宣秀本に較べ、歌員数の異同はかなりを数える。即ち、本書は宣秀本所収歌十六首を欠き、又宣秀本は本書の所収歌三首（そのうち一首は重複歌、詞書・作者名のみ欠落歌は除く）を

欠いている。本書に於ける歌数の多い少ないの問題は別として、重複歌・欠落歌・作者名誤脱・誤写など見出され、善本とは云い難いが、伝光広本・押小路家旧蔵本・岡田本（後述する）等極めて親近関係にある一系統中の一本として注目されるのである。

本書の歌数は、春部一一六首、夏部八三首、秋部一二九首（重複歌を数う）、冬部五九首、賀部二九首、別離部一六首、恋部上七一首、恋部下九二首、雑部上八六首、雑部下四六首、連歌一九首、卷末歌一首、総歌数七四七首である。右の重複歌等を別とすれば、総歌数は宣秀本より十三首少いこととなる。歌順は僅か一箇処にすぎないが、宣秀本と異なるところがある。卷十に、橘元任の歌

悲しさのその夕暮のまゝならはありへて人にとはましやは（664）

の次は本書は、能因法師の歌

あまのかは苗代水にせきくたせあまくだります神ならは神（665）

となっている（岡田本も同じ）が、宣秀本は前歌から四首さきの、源行宗朝臣の歌

いかにせむうき世の中にすみかまのはては煙と成ぬへき身を（669）

が次に続けられている（次の公夏本も同じである）。歌順はこの一箇処にすぎぬが、本書は流布本のそれに近い。しかし二度本数十本からの調査結果からすると、（664）（665）、（664）（669）の歌順はほぼ半ばするもので、早くより浮動的であったものと思われる。続群書類従本系類全般からみれば、僅か一箇処の歌順の相違はこの点からのみすれば寧ろ本書は宣秀本にやや近い位置にあると云える。ただ、相互の本文上に於ける詞書・作者の存否、語句の異同等はさきの歌員の異同と共に、かなりの相違をみるところであり、両本は、この系類の中では、それぞれに個々の系統をなしてい

るものと思われる。その意味では本書の系統の中で比較的古い写本である伝光広本の存在の意義は再確認されるべきであろう。

○岡田真氏旧蔵本

本書はつとに正宗敦夫・松田武夫両氏によって紹介された。（その後某大学研究室の所蔵と聞く。未だ披見の機会をもたないが正宗甫一氏の臨写本が現在ノートルダム清心女子大学に蔵され本稿はそれによったものである。）正宗氏は「金葉和歌集講義」の諸本解題のなかで、第一類本（統群書類従本系）中の一本として「岡田本は元禄頃の書写に係る胡蝶本で奥書は無い。群本に類似してゐるが多少の相違がある。群本の欠を補ふに役立つ本である。」と簡略に述べられ、講義中にも屢々参照されている。その後、松田氏は、「金葉和歌集の研究」のなかで、次の公夏本、さきの園林本等と比較され、「伝烏丸光広本・園林文庫旧蔵本・押小路家蔵本・岡田氏蔵本は同性質の本である」と本書について結論されている。また、近年、ノートルダム清心女子大学古典叢書刊行会に於て、公夏筆本の「金葉和歌集」が翻刻され、その対校本のひとつとして本書―さきの転写本―が扱われている。これらの調査研究によつて、すでに言い尽くされているのであるが、以後の記述の必要もあり、略述することにした。

扱、本書は正宗氏の述べられたように元禄頃の書写本であるとする、園林文庫本とほぼ同じ頃の筆写本ということになる。また園林文庫本解題に於て、宣秀本との比較をあげた際、岡田本云々と本書をも併せて異同を註記しておいたが、その結果、本書と園林文庫本とはさきの比較の限りに於ては、宣秀本に対して全く共通する異同を示している。即ち歌員の異同・重複歌・詞書作者名のみ、關落歌・連歌中みえる關落句や、更に歌順等すべて両本は一致して

いた。そのみならず、詞書・作者等の存否や相違、歌語の異同・誤写など、その殆どが宣秀本に対し、共通するのである。従つて当然の事ながら両書の親近關係は親本一本からの派生か、或は相互の転写關係かを想定したくなるのである。併し、猶更に細部全般に亘つて検するに、相互の間には語句の異同はかなりの數にのぼり、転写關係は勿論のこと依拠本もまた同じくするものとは到底考え難くなるのである。例えば、表記に於ける漢字・仮名の相違や仮名遣いの相違はともかくとして、作者名・歌句などにも多少の相違が見出されるのである。比較的顯著な例を任意的ではあるが次にあげておく。

園 林 本

本 書

宣 秀 本

(2)	またきにさける	またきさきたる	またきにさける
(29)	行かくるらん	行かへるらん	行かへるらん かゝるイ
初(50)	雲路は	雲路に	雲ちは
(40)	さむければ	さふければ	さむければ
(56)	おしみにきつる	おしみにきつゝ	おしみにきつる
(60)	嵐やみねを	嵐や峯に	嵐や峯を
(85)	色かへぬ	色かへて	色かへぬ
(123)	声なかりせは	こゑなかり○せは し	こゑなかりせは
(130)	こゑそわかるゝ きイ	声そわかるゝ	こきそわかるゝ
(163)	てすさみに	すさみに	手すさみに
(187)	友なかりけれ	友なかりせは	友なかりけれ

(190) やとる月哉

(206) わりなくやとる

初(205) しみつはくまし

(222) さらぬたに

(257) また空さえぬ

(268) 谷のかけはし

(273) となせそ秋の

(278) ふるたひに

(289) ノ次 ゆきもあはて

(302) かたのゝ野へに

(305) 春もとけすや

(315) 霜ふれは

初(438) うちともわかす

(321) 暮行としを

(321) 春いとふ名の

(331) たれか千世にも

(355) いそく心を

(363) 伊勢の海

(386) 身をいかにせん

(393) おろかなる身そ

やとる月かけ

入なくやとる

しつみはくまし

さらにたに

また空みえぬ

苔のかけはし

とせそ秋の

ふるたひに

ゆきもあかて

かたのゝ野へに

春もとけとや(或ハす歟)

雪ふれは

うち共あかす

暮行春を

春いはふなの

誰か千世にし

いそく心よ

いせの国

身はいかにせん

おろかなる身そ

やとる月かな

わりなくやとる

し水はくまし

さらぬたに

また空さえぬ

谷の梯

となせの秋の

ふるたひに

ゆきもあはて

かたのゝ野へに

春もとけすや

しもふれは

内外もわかす

暮行としを

春いとふ名の

たれか千世にも

いそく心は

いせの海

身をいかにせん

おろかなるにそ

- (397) 恋渡るとは
(401) かくとたに
(418) 身をはすてゝん
(421) しまかせに
(433) とめぬには
(463) 花をつめるも
(483) なこえにあさる
(496) なきくより
(499) 人しれす
(512) 一夜めくりの
(514) 恨むとて
(526) くるもとの里
(535) ひとゝねくさし
(537) いたしとみ
(548) こは何事のとまよとよ
(558) おりしらぬ身や
(608) 問ひともしに
(621) つきせす物を
(647) 秋はつきぬと
(655) たらちめの
- 恋わたるかな
かくとも
身をは捨ゝむ(或ハら敷)
嶋風は
とけぬには
花をつめるも
渚にあさる
嘆くより
人しれぬ
一夜のめくりの
恨む共
くるもとの里(或ハら敷)
ひとゝねくさし
くもしとみ
こは何事のさまよとよ
おもしらぬ身や
問人からに
つきせぬ物を
秋はつけぬと
たらちねの
- 恋わたるとは
かくとたに
身をはすてゝむ
嶋風に
とけぬには
花をめつるも
なこえにあまる
名きくより
人しれす
一夜めくりの
うらむとも
くるもとのさと
ひとゝねくさし
いたしとみ
こはなに事のさまそとは(或ハよ敷)
おりしらぬ身や
とふひともしに
宣秀本欠歌
秋はつきぬと
たらちめの

(669) 成ぬへき身を

成ぬへき哉

成ぬへき身を

(680) いとゝ成らん

いかゝ成らん

いとゝなるらむ

(686) なるへのなみに

よるへの波に

宣秀本欠歌

(692) こしにやあるらん

こしにあるらん

こしにやあるらむ

(句の頭に附記した番号は国歌大観のそれである。又初(438)の如くあるのは初度本番号、(290)ノ次とあるのは、初度本・流布本にない歌で、概略その歌の位置を示したものである。)

例示したものは異同の大略であるが、参考までに並記した宣秀本等と参照して判るように、両本相互の間にはそれぞれ誤読や誤写によるものが見出されるが、本書は園林本に較べ更にやや誤写の多い本のように見受けられる。また相互に附されているイ本の校合も各々異なるところがあり、従つて対校本はそれぞれ違ったものであることが知られる。もう一例として、両本に於ける作者名の異同についてみると、僅かながらもやはり相違する処を散見する。即ち、(64) 右衛門督伊通(本書)―作者名欠(園林本)、宣秀本(参考までに先例と同じく記す。以下同じ。)は右兵衛督伊通、(172) 勝超法師(本書)―勝起法師(園林本)、宣秀本は勝超法師、(321) 藤原成道(本書)―藤原成通(園林本)、宣秀本は藤原成通、(330) 源師俊朝臣(本書)―作者名欠(園林本)、宣秀本は源師俊朝臣、(545) 顕仲女(本書)―顕仲卿女(園林本)、宣秀本は顕仲卿女等の如き、やはり相互に相違・誤写があつて、細部に於ては必ずしもすべては一致しない。詞書に於ても同様に語句の異同は点在し、両書は非常に親近な關係にありながら、末端にあっては、猶かかる相違を呈するのである。併しながら、この両本の相違は、両本の類似に比すれば極く僅少のものにしか過ぎないことを思いあわすれば、又両書がいづれ共に近世中期の書写本にすぎないものでもあれば、その依拠した本は同一本でない

にしても、祖本は恐らく或る一本と考えられ、それから派生し、伝写の過程に於ける誤読・誤脱等のわずかな偶然と恣意が招いた結果であり、祖本との間には余り遠きものとは思われない。その祖本はいずれかと考えるのは、単に想像にすぎぬが、この系統のなかで、最も古い伝鳥丸光広本を思い浮かべるのもあながち不自然なこととも思われない。いずれにせよ、伝光広本・旧押小路家本・園林本・岡田本は同一系統であることは勿論のこと、伝本相互の比較から、この祖本の原型を辿ることも可能ではなからうか。

○ 正宗文庫旧藏橋本公夏筆本

袋綴一冊。梨地草花唐草文様表紙、堅二六・六糎、横十六・三糎。字面高サ約二十三・七糎。題簽・外題共になし。但し表紙右上は「式十八／公夏卿筆／老冊」と墨書した長方形の白紙を貼付する。（正宗氏の蔵書整理番号かと思われる）。墨付九六葉。白紙が前後に二葉ずつある。料紙は楮紙で、歌は一首一行書き、詞書・作者名は歌書一般の如く別行とし、每半葉十一・二行に三・四首を書写する。本書は別本との校異はないが、作者名の許に簡略にその出自を誌しているのが散見される。例えば「堀川院右大臣 頼宗 御堂第三子」、「前斎宮内侍 永縁妹」の如く細註するほか、僅か一箇処、卷十 知信朝臣の歌「虫の音はこの秋しもぞ云々」の右肩に「世継ニハ此贈答相違シタリ」と公夏の註記が見出され、前の略註と共に自らの書写本に加えた備忘のためのノートかと思われる。次の天文四年筆写本には、これらの註記は極く僅かとなっている。

本書は桂宮家旧蔵本と伝え聞く。その書写年代は室町後期と推定される。公夏筆本は、このほか天文四年の書写本が存し、その奥書に「入道前中納言藤臣 尊南 八十二」とある。この奥書本と本書の筆勢など併せみるに、両本共に公夏卿

老晩の枯淡な字体であり、いずれが前後するか俄かにきめがたいが、天文四年写本に比し、本書はやや筆端の乱れがすくなくも感じられ、わずかに遡る、いずれ公夏晩景の書写であろうか。大永享祿から、この天文に至る間の事か。橘本公夏は、諸家伝によると、従二位前権中納言公国男とあり、実は権中納言実久（清水谷）男とある。享徳三年に生まれ、長享三年（三十六才）権中納言、延徳三年正三位（三十八才）、永正十七（七イ）年三月（六十七才）に病に依り出家し、「法名反阿在播州」とある。本書の墨痕も出家後、類齢の筆跡かと思受けられる。

内題は「金葉和歌集卷第一（一十）」とある。部立は前掲諸本に同じく「春部・夏部……雑部下」とあり、流布本に多見する「春歌・夏歌」とあるに相違する。総歌数七六五首、その内訳は、春部一一八首、夏部八三首、秋部一九首、冬部五八首、賀部三十首、別離部一七首、恋部上七一首、恋部下九九首、雑部上九一首、雑部下四九首、連歌一九首、巻末歌一首である。この系類に於ては最も歌数の多い伝本である。従来、正宗・松田両氏の指摘されているように、本書は、此の系類の中では「独自の系統を立て得る本文」（松田氏、「金葉和歌集の研究」）を持つものであるのは、右の歌数、歌員の異同からも識られるのである。さきに伝鳥丸光広本系諸本については宣秀本と対比してみてきたので、本書も同様に比較略記することにする。（因みに、本書は、その後ノートルダム清心女子大学に移り、古典叢書シリーズの一部として翻印され、赤羽淑氏の細密な解題が誌されているので詳細についてはそれを参照されたい。）

まず、宣秀本との歌員の異同を前例に倣って、次にあげると、

夏部

藤原忠季

ともしすと山はしづくにそほちつゝおのへに夜をもあかしつる哉 (156) ノ次 (本書ナシ)

秋部

源俊頼朝臣

帰るさはあさせもあらし天川あかぬ涙に水しまさは (177) (宣秀本欠)

藤原行家朝臣

河霧の立こめつれはたかせ舟分行さほのをとのみそする (256) (本書欠)

紅葉の心をよめる

藤原伊家

谷川にしまらみかけよ龍田ひめ岑のもみちにあらしふくなり (263) (宣秀本欠)

冬部

千鳥をよめる

神祇伯頭仲

風さむみと嶋かさき^{いそ}きを漕ゆけは夕なみ千鳥たちゐなくなり (289) (本書欠)

百首歌中に霜を

源俊頼朝臣

住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜をきまとふ冬はきにけり初 (400) (本書欠)

賀部

大藏卿匡房

君か世はかきりもあらし三笠山峯の朝日のさゝぬかきりは (346) (宣秀本欠)

恋部下

摂政左大臣家にて恋歌よみけるに

藤原親隆朝臣

しほたるゝ伊せおのあまの袖たにもほすなるひまはありとこそきけ (470) ノ次(宣秀本欠)

物思ひ侍ける比月のあかゝりける夜あかさりし面影つねよりもたへかたうてよめる 橘俊宗女

つれくと思ひそ出る見し人をあかていく月なかめしつらん (494) (宣秀本欠)

俊忠卿家にて恋歌十首人くよみけるにおとしめてあはすといへることをよめる

あやしきもうれしかりけりおとしむるそのことのはにかゝると思へは (550) (宣秀本欠)

雑部上

山寺に月のあかゝりける夜経のたうときを聞て涙のおちければよめる

平康定女

いかてかはたもとに月のやとらましひかり侍けるなみたならすは (572) (宣秀本欠)

皇后宮美濃

よなくはまところまでのみ有明のつきせず物をおもふころかな (621) (宣秀本欠)

返し

賀茂成助

住吉のまつかひありて今日よりはなにはの事もしらすはかりそ (630) (宣秀本欠)

雑部下

返し

知信朝臣

世継ニハ此贈答相違シタリ
虫の音はこの秋しもそ鳴まざるわかれちとをくなる心ちして (648) (宣秀本欠)

龍女成仏をよめる

勝紹〔超〕法師

わたつ海の底のみくつとみし物をいかてか空の月とみるらむ (679) (本書欠)

極樂をおもふといへることを

源師俊朝臣

四方の海の波にたゞよふみくつをもなゝへの網にひきなもらしそ (686) (宣秀本欠) (一) 圏内は国歌大観番号。)

である。本書に存して宣秀本に闕く歌十一首、宣秀本に存し本書に闕く歌五首となる。

春部

(一) 春従東来といへることをよめる

覺雅法師

みちのくの衣ころもの立関立をけさたちていつのまにかは春のきつらむ 初 (2)

百首・歌の中のにはつ春の心を人にかはりてよめる

前斎宮内侍

春のくる夜のまの風のいかなれはけさ吹にしも氷とくちむ覽立 (5)

はつ春の心をよめる

太宰大式長実

いつしかと春のしるへにたつ物立はあしたの原の霞なりけり (6) (右本文ハ公夏本・傍註は宣秀本)

宣秀本は初 (2)・(6)・(5) の順である。

(二)

源俊頼朝臣

山さくらさきそめしより久方の雲ぬにみゆる滝の白いと (50)

詞書ナシ立
遠見山花といへることをよめる

大藏卿匡房

初はつせ山雲ぬに花のさきぬれはあま天の川河なみ立たつかとそみる (52)

遙見山花といへることをよめる(宣)

藤原忠隆

吉野山峯にたなひく白雲とみゆるは花のこすゑ成けり(53)(右同)

宣秀本(50)(53)(52)の順である。

(三) 三月尽の心をよめる

大僧都勝観

春の行道にきむかへほときすかたらふこゑに立やとまると(94)

中納言雅定

のこりなく暮行春をおしむとてころをさへにつくしつるかな(95)

内大臣

三月尽によする恋といへることをよめる

春はおし人はこよひとたのむれは思ひわつらふけふの暮かな(96)

重服に侍ける年三月尽の日けふのくるはいかと思ふとをとつれたる人の返事につかはしける

藤原顕輔朝臣

思ひやれめくりあふへき春たにも立わかゝはかなしき物を(97)

摂政左大臣家にて人々に三月尽の心よませ侍けるによめる

源俊頼朝臣

かへる春卯月いみにさしこめてしはし御あれのころまでもみん(98)(右同)

宣秀本、(94)(96)(95)(98)(97)の順序である。

秋部

(四) 宇治前太政大臣大井・にまかりたりけるに水辺紅葉といへることをよめる

大納言経信

大井河(宣) 浪(宣) 岸(宣) 紅葉(宣)
おほる川岩波たかし筏士よ岑(宣)のもみちにあらめなせそ (261)

太皇太后宮の扇合に人にかはりて紅葉の心をよめる

源俊頼朝臣

音羽(宣) もみち(宣) あふ(宣) 小(宣) 錦(宣)
をとほ山紅葉ちるらし相坂の関の川ににしきをりかく (262) (右同)

宣秀本は、経信歌から十三首隔てゝある、

詞書ナシ(宣)
九月尽に大井にまかりてよめる

春宮大夫公実

おしめとも四方の紅葉はちりはてゝとなせそ秋のとまりなりける (273) (右同)
の歌が経信歌に続く。即ち (261) (273) (262) の順序となっている。

冬部

(五) 雪中鷹狩をよめる

源道濟・朝臣(宣)

ぬれくも猶かりゆかむはし鷹のうは毛の雪をうちらはらひつゝ (300)

詞書ナシ(宣)
鷹狩の心をよめる

源俊頼朝臣

鷹(宣) さわ(宣) かけ(宣) かへ(宣)
はしたかをとりかふ沢に影みれは我身もともにとや帰りせり (301) (右同)

宣秀本は、道濟歌から四首隔てゝある、

三字ナシ(宣)
題不知

源俊頼朝臣

雪ふれは谷のかけ橋（橋）うつもれてこす（梢）そ冬の山ちなりける（304）ノ次（右同）

の歌が道済歌に続き、更に（301）「はしたかを」が（304）ノ次「雪ふれは」と入れ替わる。即ち（300）（304）
ノ次（302）（303）（304）（301）の順序である。

（六） 冬月宿水といへることをよめる

谷川にむすふ氷の下にさへこ（心）ろふかくもやとる月かな（312）ノ次・初（427）

家経朝臣（桂）かつらの家の障子（山里）のゑに神樂したる所をよめる（ナシ）

神葉（は）やたちまふ袖のをひ風になひかぬ神はあらしとそ思（314）

冬月をよめる

あらち山雪ふりつもる高根（ね）よりさえても出（い）るよはの月哉（313）

神樂（ナシ）の心をよめる

神かきの御室（み）の山に霜ふれはゆふしてかけぬさ（柳）かき葉そなき（315）

神樂の心をよめる（言）

朝倉（あさくら）のこゑこそ空にきこえけれあまの岩戸を今やあく（天）覧（ちむ）（315）ノ次・初（431）（右同）

宣秀本は初（427）（313）初（431）（314）（315）の順序となっている。

恋部下

「よみ人しらす」

（七）
足曳（あしひき）の山のまに（ふ）くたうれたるからきはひとりふせる（なり）成けり（524）

康資王母

源雅光

皇后宮権大夫師時

藤原致時

津の国のまろやは人をあくた河君こそつらきせゝはみえしか (525) (右同)

宣秀本は、「足曳の」の次に三首隔てゝある、

御・か・り・の・駒・の・つ・ま・つ・く・あ・を・つ・ら・君・こ・そ・ま・ろ・か・ほ・た・し・な・り・け・れ (528) (右同)
 が・続・く。即ち (524) (528) (525) の順序である。

〔よみ人しらす〕

(八) あふこなき物としるくになしかはなけ木を山とこりはつむ覧 (530)

はかるめることこのよきのみおほかれはうらなけ木をはこるにや有らん (532) (右同)

宣秀本は、「あふこなき」の次に八首隔てた、

うとましや木の下陰のわすれ水いくらの人のかけをみるらむ (531)

に続く。即ち (530) (531) (532) の順序である。

雑部下

〔詞書省略〕

源頼光朝臣

(九) たてかる舟のすくるなりけり

是を連歌にきゝなして

朝またきからろのをとのきこゆるは (703)

相模母

〔詞書省略〕

ひくにはつよきすまひ草くさ(宣)かな

よみひとしらす

・よみ人しらす(宣)
・
・
・
・

とる手て(宣)にははかなくうつる花はな(宣)なれと
(705)

〔詞書省略〕

雨ふれはきしもしとなり(宣)に成なり(宣)にけり

・あるものゝ(宣)
・
・
・
・

かさゝきならはかゝらましやは (706)

〔詞書省略〕

あらうとみれふ(宣)とくろきは(宣)鳥とり(宣)かな

頼算法師

・よみ人しらす
・
・
・
・

さもこそはすみの江え(宣)ならめよ夜(宣)とゝもに (708)

〔詞書省略〕

よるをとすなりたきのしらいと

・よみ人しらす(宣)
・
・
・
・

くり返か(宣)しひるもわくとはみゆれとも (709)

〔詞書省略〕

・前ナシ(宣)律師慶暹

・梅(實)のはな笠(實)きたるみのむし

〔詞書省略〕

・まへなるわらは(實)
・
・
・
・
・

・あめ(實) かせ(實)
・雨よりは風ふくなどや思ふらん(實) (707)

〔詞書省略〕

・なりみつ成光(實)
・成光

おくなるをもやはしらとはいふ

観遷法師

見わたせはうちにもとをはたてゝけり (710)

よみ人しらす

・花(實)くきはちるてふことそなかりける

前太政大臣家木綿(實)四手

・風(實)のまにくうてはなりけり (704) (右同)

宣秀本は (703) (704) (705) (706) (707) (709) (708) (710) の順序である。

と以上の如くである。両本に於ける歌員の異同、歌順の相違から、本書は宣秀本系とは明らかに別系統にあるものであると共に、前述した園林・岡田本系とも相異なる処に位置することが判るのであるが、これに依って現在までのところ、この所謂統群書類従初度本系の部類は、ほぼ此の三系統が並列していることが識られるのである。即ち、
(一)伝鳥丸光広筆本・押小路家旧蔵本・園林本・岡田本、(二)中御門宣秀本・統類従本、(三)橘本公夏筆の二本である。
扱、右に宣秀本・公夏本の歌の排列順序をわざわざ煩瑣に掲出したのであるが、一見してわかるように、本書は宣

秀本に較べて歌順は更に整理された形であることは、そのひとつひとつに就いて縷述するまでもなく明瞭である。例えば、詞書の有無・異同について両本と比較してみても、其処には、尠くとも宣秀本の歌順を本書のそれに改変する意図の許に、撰者が新たに試みた統一的意向が働いているように思われてならない。そして、これとは反対の場合は右例から想定するのは甚だ困難である。併し、この推定も主観に立脚したものにすぎないと云えばそれまでである。そこで、これとは別に、この両本の異同をあげた歌尾に附しておいた国歌大観の番号であるが、この番号の歌順はほぼ流布本系（正保版）の歌順とみて差しつかえないものであり、それは、所謂二度本、この部類の次の撰集過程と考えられる諸本の歌順と一応は設定してよいのである。

さて、この掲出した両本の歌順の番号を見るに、連歌の部、ほか一・二例を除き、本書は大略国歌大観番号の順序を追っているのに対し、宣秀本のそれは、かなり不順な現象を示しているのは前記した通りである。本書の場合を(一)の例からみてゆくと、問題になるのは、(二)の例、(50)(52)(53)の順序であるが、(51)の内大臣歌「散らぬまは……」はこの系類すべて(40)の経忠歌「この春は……」の次にあり、流布本に於ても八代集抄はじめ諸本過半がこの順序である。次に(六)の例であるが、これは初(427)(314)(313)(315)初(431)の順となり、(314)(313)と逆になっているのに対し、宣秀本は初(427)(313)初(431)(314)(315)と寧ろ歌順は国歌大観のそれに近い。しかし、これも流布本系數十本中、この歌順は相半ばして絶えず流動する様相を示しているの、国歌大観の歌順はそのまま流布本系の歌順を示すものとは考えられない。次の(六)の例も、(530)(532)となるのに対し宣秀本は(530)(531)(532)と順序を追っているのであるが、この(531)の歌は流布本系過半がこれを欠いており、版本系に属するものに存して、この順序となっている。恐らくこれも流布本過程の切継に於ける浮動的な歌であったが故に歌順の混乱を招いたものであろう。が、本書

で(539)の「ぬす人と」の次に置かれているのは、この場合、明確に説明し得ない異現象を示していることとなる。

最後に連歌の処であるが、本書は(703)(705)(706)(708)(709)(707)(710)(704)の順序であり、宣秀本は(703)(704)(705)(706)(707)(709)(708)(710)と排列され、判然と国歌大観の順序に近いのである。これについて流布本系伝存諸本を検するに、本書の歌順を示すものはいまだ管見に入らぬ。寧ろ宣秀本のかたちをとるものが、かなりの数にのぼるのである。但し、その場合、殆どが(704)の連歌を欠いているのである。とすると、(704)の連歌は二度本にあつては棄却されてゆく運命にあつたとも云えなくない。従つて一応この連歌を除いて考えると、宣秀本の(707)(709)(708)(710)の歌順は伝存諸本の中多く散見するが、このほかに(708)(707)(709)(710)や(708)(709)(707)(710)などの排列もまま散点するところであり、又、連歌の部の歌順は諸本甚だしく異同を示して、特にこの(707)と(709)等の連歌の順序は屢々流動的であつたと考えねばならない。本書のような排列も或いは、この浮動性の一端を語るものであろうか。撰者自身にも確たる基準を其処に表出する意義を見出し得なかつた迷いかかもしれない。いずれにせよ、四季の和歌に於けるほどには、この連歌の排列自体はそれほど特に重視する必要はなかつたのではなからうか。ともかくも本書はこの一・二例を除き国歌大観の歌順に一致する。そして、この一・二例も右の如く或る程度は説明のつく不順現象である。また国歌大観収録の金葉和歌集は正保版系の伝本であることを前提におけば―勿論必ずしも流布本を代表するものではないとしても―流布本の前段階にある所謂群書類従本系の諸本の中では、歌順という撰集形態の上からみれば、本書は流布本により近い形態を示していることとなる。当然の事ながら宣秀本は、形態上本書より前の撰集過程にあることが推論されるのである。即ち贅言すれば宣秀本系が更に整理され統一されてゆく途路に本書の如き形態があつたと考えてさしつかえないのではなからうか。

さて、この形態より、この部類の諸本について一応総括すると、宣秀本・続類従本は同系であるので問題はないが、伝光広本・押小路家本・園林本・岡田本系については、さきに宣秀本との比較のなかで述べた如く、わずかに一箇処歌順の相違を見出すにすぎないので、——この一箇処に限り宣秀本は公夏本と一致するのは既述した通りであり——その点宣秀本に近似することとなって、この両系は本書と相對するのである。従つて、この形態上よりみれば(一)伝光広本・押小路本・園林本・岡田本、(二)宣秀本・続類従本は、尠くとも(三)の公夏筆兩本の撰集形態以前の一形態を示すものと考えられるのである。(一)・(二)の系統の前後については、僅か一例から判断し得ない。その点については、諸本に於ける歌員の異同を総括しながら併せて述べることにする。

以上、公夏本・宣秀本兩本の比較の場を借りて、歌順という形態面から諸本を概括したのであるが、この三系統の歌員の相違もさることながら、本文自体の異同という点よりみても、比較的ではあるが、本書は(一)・(二)の系統と対立する關係が見出されるのである。それについては次稿にあらためて述べることにする。

○ 正宗文庫旧蔵 天文四年橋本公夏筆本

綴葉装一冊。梨地花卉文様裂表紙、堅二十四・五糎、横十六糎。見返し金銀箔散らし。料紙は厚手楮紙、両面書。字面高サ約二十二糎。題簽、表紙左肩、短冊型白紙に「金葉和詞集 全部」と墨書する。内題は「金葉和歌集卷 第一(一十)」とあり、每半葉八行乃至九行に三・四首が書かれている。墨付百三十五葉、白紙が前後に一葉ずつある。本書は奥書をもつ。即ち

此集令付属書写山寺住侶実祐／已講之所如件／于時天文四年初陽上浣候／入道前中納言藤臣八十二 花押

とある。第一葉（白紙）に琴山の極札が貼付され、それに「金葉集 橋本殿公夏卿 奥書御名判 琴山印」とある。橋本

公夏卿晩歳の筆写本である。諸家伝に「法名反阿在播州」とあるように、永正十七年（六十八歳）出家し、播州に居を
トした公夏が、かの地の書写山住侶実祐に書写して与えたものか。筆体は前書にくらべ更に枯淡な風格をおびる。

本書は前書と極めて類似し、恐らくは前書に拠って派生した一本かと思われるが、次の二首を欠くほか、多少の本
文異同が見出され、その間の事情は猶憶測し難い。まず、その二首は

源俊頼朝臣

時鳥こゑまちつけてきくほとや人に我身のうらやまるらむ（夏部）

石山にまいりけるに大津にとまりて夜ふけてきゝければ人のけはひあまたしてのゝしりけるを

尋ねければあやしのしつのめかよねしらせ侍るなりと申けるをきゝてよめる 和泉式部

鷺のある松原いかにさはく覧しらせはうたて里とよみけり（雑部上）

である。そのほか、詞書・歌・作者名等に若干の相違を見出す。歌・作者名の著しい異同を例示しておく。まず歌
句のそれは

無奥書本 本書

(21) のこせそと思 のこせそと思

(65) いくゐにいとゝ ゐくひにいとゝ

(140) 我身のうきを 我身のうきに

(158) ひとつ木すゑを ひとつ木すゑに

(236) さほ鹿の群

(276) ふかくなりける

(296) たるひすかれり

(363) くはてゝ
マ、

(384) 逢事は

(395) すさみ成とも

(453) 恋わひぬ

(662) 世のうき雲そ

(668) 秋のよの月

さほ鹿の声

ふかくなり行

たるみすかれり

くちはてゝ

逢事を

すさひなりとも

恋わひて

世はうき雲そ

山のはの月

等の程度にすぎない。作者名の場合をみると前書(100)藤原盛房を藤原盛方とし、初(324)藤原季孝を藤原季房(初度本は重孝)としているのが見出される。詞書にも歌句程度の異同箇処が散見されるが、一・二例をあげると、(253)の詞書「野草留人」が本書では「野花留人」となるのや、(508)の「世にあらんかきりは忘れしと」が「世にあらんほとは忘れしと」などが目につく。特に、後者の場合、校合するイ本は前書の本文であるのが注意される。また、歌順にもわずかに一箇処にすぎないが相違する処がある。即ち

〔読人不知〕

近江にかありといふなるかれ山君はこえけり人とねくさし(535)

逢事はなからふる屋の板しとみさすかにかけて年のへぬらむ(537)

が本書では逆に(537)(535)の順序となっている。前に歌順について諸本一括して述べたが、この歌順は本書のみである。流布本中にもいまだ管見に入らぬ。天理図書館蔵一本に(536)(537)(538)(535)、京大図書館蔵一本に(536)(535)(538)の順序が見出される程度である。従って、これらの例から、本書が前者の正確な転写本ではないことは明らかであるが、これを除くと、本文・歌順など共に余りにも類似し、また、同一筆者であることなど思い合わせる、本書は前書とは全くの別本によって筆写したものと考えられない。両本の間にはやはり親近な関連が想定され、或は前書の筆写後、これによる別の転写本なり、公夏自身の校訂など加味されたところから派生した一本かとも想像されるのである。「已講之所如件」など奥に誌すも這般の事情を指すものか。

そのほか、両本の相違の概略を示すと、前書に見えた、(648)の歌に附す傍注「世継ニハ此贈答相違シタリ」などはなく、また作者名の許に細記した作者の出自などは、わずか数例をそのままとどめるにすぎない。即ち(31)「新院御製 鳥羽」(32)「太政大臣 雅」(446)「前太政大臣家安芸 橘俊宗女」(585)「前^ア齊宮内侍 永縁妹也」などである。また表記に於ける漢字・仮名、或いは仮名遣いの相違などは当然見出されるが、いずれにしても、この両書は同一本書として扱われるべきものであらう。

註一、松田武夫氏は、「金葉和歌集の研究」に於て、岡田希雄氏の論攷等をふまえ、更に、本集作者の藤原経忠の署名の書き方―従三位経忠・左京大夫経忠など―が同じ初度本中に異なることに注目され、左京大夫任官の期日が天治元年十二月廿日であることから、初奏本は恐らく、これ以後の成立と推定された。

註二、今鏡「武蔵野の草」の巻に云う。

また覚雅僧都とてもおはしき。歌詠みにてぞおはせし。末の世の僧など、さやうに詠まむはありがたくや侍らむ。白河院の

いとしもなく思し召したる人にておはしけるに、俊頼の君、金葉集撰びて奉りたりける始めに貫之「春立つ事を春日野の」といふ歌、その次に覺雅法師とて入り給へりけるを、「貫之もめでたしといひながら、三代集に漏れきて、あまり古びたる。覺雅法師も、げにともつゞき覺えず」など仰せられければ、古き上手ども入るまじかりけり。またいとしもなく思し召す人除くべかりけりとて、御覺えの人をのみ採り入れて、次の度奉りければ、「これもげにとも覺えず」と仰せられければ、また作り直して、源重之、初めに入れたるをぞとめさせ給ひけるは、隠れて世にも弘まらで、中度のが世には散れるなるべし。（日本古典全書）又、同書、「源氏の御息所」に云う。

東宮夷仁と同じ腹に、第三の御子おはしき。輔仁の親王と申しき。延久五年正月に生まれ給へり。承保二年十二月に、親王の宣旨かうぶり給ふ。この親王は、才おはして、詩など作り給ふ事、昔の中務の宮兼明具平などのやうにおはしき。歌詠み給ふ事も優れ給へりき。園宗寺の花を見給ひて

植ゑ置きし君なき宿に年経たる花は我が身の心ちこそすれ

と詠み給へるこそ、いと哀れに聞え侍りしか。かやうの御歌ども、木工の頭俊頼の撰びて奉れる集に、輔仁の親王と書きたりければ、白河の院は、「いかにこゝに見む程、かくは書きたるぞ」と仰せられければ、三の宮とぞ書き奉れる。御中らひは、善くもおはしまさざりしかども、御弟なればなるべし。（上掲書）

註三、増鏡「おどろのした」の巻に云ふ。

又、白川院おりゐさせ給てのち、金葉集かさねて俊頼朝臣におはせて撰ばせ給にこそ、初め奏したりけるに、輔仁の親王の御なりの書きたる、わろしとて返され、又奉れるにも、なに事とかやありて、三度奏して後こそ納まりにけれ。かやうの例も、をのづからの事なり。をしなべては、撰者のまゝにて侍なれど、こたみは、院の上みづから、和歌浦に降りたちあさらせ給へば、まことに心ことなるべし。（日本文学古典大系）

註四、袋草子 卷二に云う。

金葉集 和歌 六百五十四首、此外連歌十六首、但流布本是也。

白川院御讓位之末、俊賴朝臣一人奉_レ院宣撰_レ之。天治元年月日奉_レ之。大治元二年之間上_レ奏之。此集本不_レ定也。奏覽之處而度返却。第三度之度以_レ中書之草案先覽_レ之。而件本無_レ左右_二納畢_一。仍撰者許無_レ此本_二云々_一。件本在_レ故待賢門院。而今前大相国申出書_二写_一之。無_レ余所_二云々_一。件本兼盛能宣歌并_レ玄々集、拾遺集歌等入_レ之。拾遺柄成_レテ称_二弃置之由_一入_レ之也。最前之歌集、貫之〔重之ノ誤カ〕ガ吉野山峰ノ白雪何消ての歌也。世間流布本第二度本也。近代人歌等也。最前故將作打麿歌也。奏覽本、造紙云々。自筆書_レ之云々。時有_二基俊云者_一。兼和漢_二尤便_一撰者。雖_レ然不_レ奉_レ之。若為_二御不請之者_一故歟。(日本歌学大系)

註五、八雲御抄卷第二作法部

金葉 初_レ入_二三代集作者_一。中度流布定後始入_二源重之_一。有_二連歌_一。三ヶ度撰改。以_二第二度本_一流布。多_レ近世人。但六帖歌并道濟相模等入_レ之。(上掲書)

註六、伝後京極授政良経筆 三奏本奥書に云う。

抑此集者 白河院御讓位之末俊賴ノ朝臣奉 院宣撰之天治元年奉 勅ノ大治元二之間奏之此集本不定也ノ奏覽之處兩度返給之初度進覽本ノ一番三宮御哥也

としの中にはるたちくれはひとゝせにふたゝひまたるうくひすのこゑ

第二度進覽本一番顯季卿哥也

うちなひきはるはきにけりやまかはのいはまのこほりけふやとくらん

此本等世間流布也以上二ヶ度被返下了

第三度奏覽本一番哥源重之哥也

よしの山みねのしらゆきいつきえてけさはかすみのたちかはるらん

今度奏覧本無左右被納了以／撰者之自筆○造帙云々件本者拾遺／集玄々集哥等多以入之当本既是也／可指南歌

松田直兄は、伝良経筆本の覆刻（天保四年）に当り、その附録に、

直兄考るに此本の奥書と袋草紙の説と大むね同じく八雲御抄増鏡ともにことなることあらされと統世継のみ初度の巻頭の歌たかへれは初度の本ひきあはせ見るにいかにも貫之の年のうちに春立ことをみ芳野のといふ哥はしめてに其次のうた覚雅法師なれば統世継のかた正しかりけり

と述べている。又、井上通泰博士は、「校訂金葉和歌集」緒言に於て、右の奥書を引用し

トアリ。伝ニヨレバ原本ノ筆者ハ後京極摂政良経ナリト云フ

続群書類従ニハ又初度本トイフヲ収メタレド其巻頭ノ歌ハ流布本ト齊シク顯季ノうちなびき春は来にけりトイフ歌ナリ。抑初度本最前ノ歌ハ今鏡ニヨレバ貫之ノ年のうちに春たつことをかすが野のトイフ歌、三度本即所謂三奏金葉集ノ奥書ニヨレバ輔仁親王ノ年のうちに春たちくれれば一とせにトイフ歌ニテ二書ニ云ヘル所相異ナルガ如クナレド其初二ノ句ノ相似タルヲ見レバ同一ノ歌ヲ二様ニ伝ヘタルナリトオボユ。即初度本ノ一番ハ貫之ノ歌ニカ三ノ宮ノ御歌ニカ知ラネド年のうちに春立云々ト云フ歌ナルナリ

と述べ、作者は分明にせずも、巻頭歌は同一歌を二様に伝えたものと見ている。

註六、松田武夫氏は「勅撰和歌集の研究」の中で、右の井上博士の説を引かれ

この説は余りにも牽強附会にして肯定し難い。むしろこの二書は全然異つた本ではあるまいか。井上博士は、初度本は一つ有つて只一つに限るものと云ふ様な考へから、かく推断されたのであらうが、かくの如く狭く考へる必要なく、今鏡に云ふ初度本の成立以前に於ても数種の校本が存在してゐたであらうと考へてさしつかへないのである。このことは他の勅撰集

の成立過程に於ても同様な現象が見られる。まして作者が三宮と貫之との相違あれば、これらの二本は同一初度本にあらざるものと推定するのである。但し、實際問題として、輔仁親王とかいた本、及三宮の歌を巻頭に置いた如き金葉集の伝本は不幸管見に入らないので、実証的に確説を樹立することは不可能で、只單なる推定説に止どまるのである。とまれ、現在かかる伝本が出て来ないからこれを否定すると云ふ態度はよくなく、かかる推定説が何時かは事実の上で立証され、真实性を附与される時が無いとも限らないのである。

と、論述されている。現在のところ至当な結論と云えよう。

(二) その撰述過程に就いて

諸本に就き、以上縷述を重ねて来たのであるが、ここで一応、それら相互の間に於ける比較の結果を總括し、併せてこれらの伝本の撰述の経過を如上の結果から考察することにする。しかし、その前に、ひとまず、初奏本棄却のあと、この系類に至る過程に、實際に、どの様な切継がなされたのか、具体的に例示して、金葉和歌集に於ける第一期の変遷の実態をみることにする。

次に掲出したのは初度本（巻五迄）から、この段階に於てまず切出された歌員である。諸本間相互に多少の異同があるが、共通する歌が過半を占めるので、比較本文には歌数の最も多い橋本公夏筆本（無奥書本）をあてることとした。また、諸本間の異同により公夏本に欠歌の場合は園林本本文を以てし或いは公夏・園林両本欠歌の際は宣秀本文によった。そして歌頭に附した番号は初度本のそれであり、歌末に（一）内に記した番号は国歌大観番号である。

以下同様であるが、この続類従本系類は歌敷・歌順が流動するので、本稿の場合すべて、これに依ることにする。

春部

歳中立春こゝろをよめる

紀貫之

1 としのうちに春たつことを春日野のわかなさえにもしりにけるかな

□□のはしめの哥とてよめる

源俊頼朝臣

3 いつしかとけさはこほりもとけにけりいかてみきはに春をしるらん

天徳四年内裏哥合に読る

中納言朝忠

4 くらはしの山のかひよりはるかすみとしをつみてやたちわたるらん

平兼盛

5 ふるさとははるめきにけりみよしのゝみかきかはらも霞こめたり

堀川院御時百首哥めしたるに霞の心をつかまつれる

源俊頼朝臣

9 なみたてるまつのしつみ^えをくもてにてかすみわたれるあまのはしたて

はるのゆきをよめる

曾禰好忠

12 ゆきゝえはあくのわかかもつむへきにはるさへはれぬみやまへのさと

天徳四年内裏哥合に驚の心をよめる

源順

13 こほりたにとまらぬはるのたにかせにまたうちとけぬうくひすのこゑ

平兼盛

14 わかやとにうくひすいたくなくなるをにはもはたらに花やちるらん

天徳四年内裏哥合に読る

中納言朝忠

21 わかやとのむめかえになくうくひすはかせのたよりにそをやとめにし

平兼盛

22 しろたえのゆきふりやまぬ梅かえにいまそうくひすはるとなくなる

梅花落水といへることをよめる

源雅兼朝臣

28 さけはちるこすゑのみかはむめのはななかるゝ水もとまらさりけり

鷹司殿賀屏風に子日したるかたかけるところをよめる

赤染

29 よろつよのためしにきみかひかるれはねのひのまつもうらやみやせん

百首哥中にわかれの心をよめる

曾禰好忠

31 ねせりつむ春のさはたにおりたちてひくものすそのぬれぬ日そなき

屏風の絵にをんなとものわかなつめるところをよめる

紀貫之

32 わかなつむわれを人みはあさみとり野へのかすみもたちかくさなん

亭子院哥合に読る

坂上是則

33 あさみとりそめてみたれるあをやきのいとをは春の風やとく覧

天徳四年内裏哥合に柳を讀る

平兼盛

34 さをひめのいとそめかくるあをやきをふきなみたりそ春の山風

春の哥とて読る

伊勢

43 うくひすのなくねをまねふ山ひこはともありかほにもとめつるかな

信永法師

48 きりふかみこしかりかねそかへるなるかすみのうちにこゑはかりして

読人しらす

49 見てもあかぬ花のさかりにかへるかりなをふるさとに^の春や恋しき^ヒ

大宰大式長実

新院御方にて風なくして花ちるといふ事をよめる

59 うつろへはをのかこゝろとちるはなをさのみは風におほせさらなん

右兵衛督伊通

60 しら雲とみねにはみえてさくら花ちれはふもとのゆきとこそなれ(72)

大宰大式長実

遠山見花といへることをよめる

63 人しれすこゝろをやりて見るはなは^{お殿}たちなへたてそみねのしらくも

源忠季

行路花といへる事をよめる

73 さくら花みるにこゝろ^はのつきなからいかにすきうきやまちならん^ヒ

藤原経資

花をよめる

79 さくらはなまた見むこともさためなきよはひそかせよ心してふけ

紀貫之

80 かつ見つゝあかすとおもへはさくらはなちりなんのちそかねて恋しき

頭季卿家にて桜花哥十首人々読けるによめる

藤原頭輔朝臣

90 をしむともいくかもあらしさくらはなこゝろのまゝにをりてかへらん

題不知

凡河内躬恒

98 おきふしておしむかひなくうつゝにもゆめにも花のちるよなりけり

天徳四年内裏哥合によめる

大中臣能宣朝臣

99 さくらはな風にしちらぬものならはおもふことなき春にそあらし

百首哥中に春の哥とて読る

源重之

102 はなさくらつもれるにはに風ふけはふねもかよはぬなみそたちける

雨中見花といへる事をよめる

藤原親経

103 おしなへてかせのみやはいとふへきぬるゝははなのをしからぬかは

はなのちるをみてよめる

凡河内躬恒

105 さくらはなちりぬるときはみもはてゝさめぬるゆめの心地こそすれ

三月三日桃花をよめる

経信卿母

107 やまかつのそのふにさけるもゝのはなすけりなこれをうへて見けるも

春夜月をよめる

中務

108 はなぢらはおきつゝも見むつねよりもさやかにてらせはるのよの月

をなし心をよめる

大宰大式長実

116 はるふかみ神なみかはにかけみえてうつろひにけりやまふきの花(82)(岡田本・園林本二欠ク)

花山院御時の哥合によめる

大中臣能宣

117 ひとえたにあかぬころをいとしくやへかさなれる山ふきのはな

藤原惟成

118 かはつなく井てのわたりにこまなめてゆきてにも見むやまふきの花

麗景殿女御哥合に読る

読人不知

119 やへさけるかひこそなけれやまふきのちらはひとへもあらしと思へは

紫藤蔵松といへる事をよめる

良暹法師

125 まつかせのおとせさりせはふちなみをなにかゝれるはなとしらまし(88)(岡田本・園林本二欠ク)

やよひのつこもりにふちの花を見てよめる

中務

129 ふちのはなさくを見すてゆく春はうしろめたくやおもはさるらん

藤原盛致

131 はなのみやくれぬる春をかた身とてあをはかしたにちりのこるらん(93)

三月尽のころをよめる

藤原定成朝臣

132 いくかへりけふに我身のあひぬらんをしむは春のすぐるのみかは

源雅光

134 わりなきはけふのみとおもふはるの日のやまのはちかくなるにそありける

摂政左大臣

136 ゆくはるのすかたにみえぬものなれはひきたにえこそとゝめさりけれ

中納言朝忠

137 はなたにもちらてわかるゝはるならはいとかくけふとおしまさまし

夏部

天徳四年内裏哥合に夏草をよめる

壬峯忠見

146 なつくさのなかをつゆけみかきわけてかる人なしにしけるころかも

源相方朝臣

卯花廻牆といへる事をよめる

150 としをへてかよひなれにしふるさとのかとゝふはかりさける卯花

藤原節信

郭公をたつぬといへる事をよめる

158 けふもまたゝつねくらしつほとゝきすいかてきくへきはつねなるらん(112)(岡田本・園林本ニ欠ク)

坂上望城

天徳四年内裏哥合読る

164 ほのかにそなきわたるなるほとゝきすみやまをいつるけさのはつこゑ

大宰大式長実

鳥羽殿哥合に読る

165 むかしよりなきけんものをほとゝきすふりにしこゑといふ人のなき

壬峯忠峯

173

ふるさとはこたかけれともきみならぬほとゝきすにもうとまれにけり

紀貫之

184

屏風の絵に早苗とる人の郭公をきゝけるかたかけるところをよめる
ほとゝきすなくなるこゑをさなへとるてまうちやめてあはれとそきく

郁芳門院根合に五月雨の心を

六条右大臣

200

さみたれにかさとりやまはこえゆかしはないろころもかへりもそする

閏五月侍けるとし人をかたらひけるにのちの五月すくしてなとましやりければよめる 橘季通

204

なそもかくこひちにたちてあやめ草あまりなかひく五月なるらん（この一首、初度本夏部にあるが、流布本恋歌上

（413）の処にあるので附記する。）

五月雨のこゝろをよめる

源俊頼朝臣

205

さみたれはふるからおのゝわすれみつをしひたすらのぬまとこそ見

照射心を詠る

橘俊綱朝臣

213

ともしゝてはこねの山にあけにけりふたよりみよりあふとせしまに

藤原忠兼

216

ともしすと山のしづくにそをちつゝおのえによをもあかしつるかな（公夏両本に欠く）

紀貫之

219

屏風のゑにかりしにまかる人の池辺にやすむかたかけを詠る
まこもかる夏野ゝぬまのうきぬなはくる人なみにまかせてそ見る

大中臣能宣朝臣

220 風のをるなみのあやをやなつころもたつたのかはといひなかしけん

月照夏草をといへる心をよめる

藤原定通

223 風ふけはしとろにみゆるくすのはのかけさたまらぬなつのよの月

六月のついたちのころにはたをりといふむしのなきけるをきゝてよめる

江侍従

224 なつのうちははたかくれてあらずしておりたちけるむしのこゑかな

秋部

勝超法師

241 こひわたるなみたのふちとなりはてゝあふせまれなるあまのかはかな

七夕にせんさいあるところにて殿上の人々おほくあつまりて哥詠けるに

露といふものをとりてよめる

大中臣能宣

244 いとゝしくおもひけぬへしたなはたのわかれのはにおけるしらつゆ

宇治にまかりけるみちにたこのみつひきけるを見てかくなんと申ければ前太政大臣みにまかりたりけるに

水もみえさりければいかにとたつねけるをきゝて七月七日なりけるによめる

菅野為重

245 ひくみつもけふたなはたにかしてけりあまのかはせにふなてするとて

花山院御時の哥合に月の心を読せ給ける

花山院御製

257 秋の夜の月にこゝろはあくかれて雲井にものをおもふころかな

大納言経信

258 いつも見る月そとおもへとあきのよはいかなるかけのそふるなるらん

河原院哥合に月かけ漏宿といふ事をよめる

読人不知

279 あめならぬとしのふるにもわかやとは月もるはかりあれにけるかな

題不知

平光俊

280 なにゆへにあたしうき世とおもひけんさてはこよひの月をみましや

雲居寺哥合によめる

藤原康貞女

285 秋の夜のくもふきはらふあらしこそ月みる人のこゝろなりけれ

月をよめる

紀貫之

286 てる月をひるかとみれはあか月ははねかくしきもあらしと思

宇治前太政大臣家にて九月十三夜翫明月といへる心をよめる

300 さむしろにころもかたしきかさぬれと月のひかりにしくものそなき

中納言明兼
原兼

311 とりとむるものにしあらは山のはにいてそ見まし秋の夜の月

旅所月といへる事をよめる

源国房

316 つゆむすふ草のまくらによもすからひとりありあけの月をみるかな

貫之

321 かりなきてふく風さむみからころもきみまちなねてうたぬよそなき

旅宿の心をよめる

戒禪法師

322 秋の夜はふけゆくまゝにあしろきのやまひこさへそこらもうつなる

野亭鳴鹿といふ事をよめる

源俊頼朝臣

328 さをしかのなくねはのへにきこゆれとなみたはこのものにそありける

暁思野花といへる事をよめる

中納言実行

331 しからまんしかよりほかにあさたちてつゆなからみむおのゝはきわら

法成寺太政大臣家哥合に岸辺草花といへることをよめる

源重之

336 ゆくみつのきしにゝほへるをみなへししのひになみやをもひかくらん

百首哥中にかるかやをよめる

修理大夫顯季

341 うつらなくかりはのをゝかるかやのおもひみたるゝ秋のゆふくれ

すゝきを読む

神祇伯顯仲

344 しほかせになみよるうらの花すゝきしつくをはらふ袖かとそみる

いまはしもほにいてぬらんあつまちの石たのおのゝしのゝをすゝき

藤原伊家

345 つゆをよめる

あさことにはなのたもとにおくつゆや人まつむしのなみたなるらん

藤原顯輔朝臣

347 八月廿日ころにむしのこゑをきゝてよめる

赤染

348 ありあけの月はたもとななれつゝかなしきころのむしのこゑかな

つゆをよめる

源忠季

349 秋きりのいなのをこめてたちぬれはこすゑもみえすこやのいけ水

はつせにまいりたりけるにさを山のふもとにやとりてあしたにきりのたちわたりて

侍ければよめる

惠京法師

352 もみちみにやとれるわれとしらねはやさほのかはきりたちかくすらん

霧をよめる

藤行家朝臣

353 かはきりのたちこめつればたかせふねわけゆくさほのおとのみそする(256)(公夏阿本ニ欠ク)

きくのうつろふをよめる

僧正行尊

354 しらきくのはなこゝろにもみゆるかなうつろふへしやひとよはかりに

水辺の紅葉をよめる

藤原行家朝臣

362 おほ井河きしのもみちの色にいてゝをりにあへりとみゆるけふかな

水上落葉をよめる

源明国朝臣

366 井くひにももみちのにしきかゝりけりくちぬる身にもおもひなけかし

小野といふ山さとにまかりて晩頭落葉といふ心をよみ侍ける

源雅光

367 くる人もくるれはかへるやまさともみちもえたにとまらざりけり

落葉をよめる

紀貫之

369 もみちはのわかれをしみて秋かせはけふはみむろの山をこゆらん

水辺落葉をよめる

藤原仲〔伊〕家

371 たにかはにしからみかけたつたひめみねのもみちにあらしふくなり(263)(岡田本・園林本・宣秀本・統群本ニ欠ク)

ものへまかりけるみちにもみちのをかしくちりければよめる

江侍従

372 もみちはをたつぬる人にあらねともにしきをのみそ身にきつるかな

大和守資成法師になりて普門寺こもりぬときまかりたりけるに

このはちるをみてよめる

藤原盛方

375 みるたひにあはれさまさるすみかなよを秋風のこのはちりつゝ

屏風のゑに田のほとりにかりしたるかたかけるをよめる

中務

376 袖ひちてうゑしはるよりまもるたをたれかしられてかりにきつらん

雨中秋尽といへる事をよめる

大納言経信

378 いつかたに秋のゆくらんわかやとにこよひはかりはあまやとりせよ

冬部

一条院御時皇后宮十月はかりに思はん事かきてたてまつれと侍ければたてまつりける哥

393 ねさめしてたれかきくらんこのころのこのはにかゝるよはのあらしを

馬内侍

百首哥中に冬のはしめの心を読む

源重之

394 さむからはよるはきてねよみやまとりいまはこのはもあらしふくなり

あしろを讀る

紀貫之

396 おちとまるもみちをみれはもゝとせにあきのとまりはあらしなりけり

百首哥の中に霜をよめる

藤原仲実朝臣

399 としふれはわかいたゝきにをくしもを草の上ともおもひけるかな（この一首、初度本冬部にあり、ただし流布本に於ては卷九雜上（605）の処にあるので附記する。）

源俊頼朝臣

400 すみよしのきしのかたそきゆきもあはてしをきまよふ冬はきにけり（公夏阿本ニ欠ク）

百首哥の中に冬の心をよめる

曾禰好忠

402 しはきたくいほりにけふりたちみちてたえすものをもふ冬のやまさと

中納言顯隆

405 ふゆふかみたま井し水もこほりしてをしのはかせもたえにけるかな

閑中月をよめる

春宮大夫公実

409 かれはてゝ人もおとせぬやまさとに我をわすれぬ冬の夜の月

雪のふるをみてよめる

紀貫之

420 春ちかくなりゆくまゝにおほそらはなをかねてそ雪はふりける

氷の心をよませ給へる

三宮

429 つなかねとなかれもやらすたかせふねむすふこほりのとけぬかきりは（316）（岡田本・園林本ニ欠ク）

題不知

曾禰好忠

430 まふちふのしはかるたみのてまをなみつかねもあえす風のさむさに

題読人不知

433 おもふとも冬のよすからねはなかし□□□□そてのつらゝとけせぬ

曾禰好忠

435 にほとりのこほりのせきにとちられてたまえのやとをあれやしぬらん

496 みやま木をあさなゆふなにこりつみてさむさをこふるをのゝすみやき

賀部

屏風のゑに人のいゑあり松につるゐたり女なかめてゐたるところを読む

紀貫之

449 わかやとのまつのこすゑにすむつるはちよのゆかりとおもふへらなり

法成寺太政大臣家哥合に水辺松といへる事をよめる

大江嘉言

451 きみか世のためしにたてる松葉にいくたひみつのすまんとすらん

河原院哥合松臨池といへることをよめる

惠慶法師

452 たれにとかいけのこゝろをももふらんそこにうつれるまつのちとせを

題不知

紀貫之

453 ちよまてのゆかりにしあればまつかせにたくひてたつこのゑきこゆなり

祝の心を読む

紀貫之

463 いくよへしいそへのまつもむかしよりちりよるなみやかすをしるらん

大藏卿匡房

468 きみかよはかきりもあらし御笠山みねにあさひのさゝんかきりは(346)(園林本・岡田本・宣秀本・続類従本に欠く)

以上が、初度本から切出された歌である。諸本間の異同をまとめると、

(一)岡田本・園林本(同系本として伝光広本・押小路家旧蔵本を含む)は公夏両本に対し、116長実歌・125良運法師歌・158節信歌・371仲〔伊〕家歌・429三宮歌・468匡房歌の六首が相違し、総計一一〇首が切出されている。(二)宣秀本・続類従本は同様に公夏本に対し、371仲〔伊〕家歌・468匡房歌の二首相違し、この点岡田・園林本と一致して、総計一〇六首。(三)公夏両本は前の四本とは別に216忠兼歌・353行家歌・400俊頼歌の三首が見出され、総計一〇七首が切出されている。初度本巻五迄の春部一三九首(巻末補写一首を除く)、夏部九二首、秋部一四七首(巻末補写二首を除く)、冬部六一首(巻末補写二首を除く)、賀部三一首(巻末補写三首を除く)―四七〇首のなかから一〇六首―一一〇首の多きにわたる切捨が行なわれている。そのうち三代集歌人の歌がほぼ半数に近いのは白河院の尊旨に沿っての切継であろうが、すでに、この段階に於て金葉和歌集は面目を一新する過程にあったといえる。初度本からこの段階に至るの間には種々多くの問題を残すが、当面の問題として前記伝本のおかれた位置を示すためにその変移の過程を例示したまでである。

さて、ここで留意されるのは、宣秀本・園林本は共通する二首を持つが、公夏本は三首共に前者と相違することである。それは公夏本の独自性を意味するものであろう。又、それと共に、この棄却された歌の中で所謂二度本に於て再録された歌についてである。数は尠くないが、60伊通歌(国歌大観番号(72)、以下同)、116長実歌(82)、125良運法師歌(88)、131盛致歌(93)、158節信歌(112)、345伊家歌(252)、353行家歌(256)、371仲〔伊〕実歌(263)、429三宮歌(316)、468匡房歌(346)

の十首がある。このことは、尠くとも、この十首は一旦切出され、更にあらためて流布本の段階で再び採録されたものとみなされねばならない。而も―諸本共通する三首、伊通歌・盛致歌・伊家歌は別にして―その十首のうち六首は園林・岡田本であり、宣秀本・続類従本の二首は前者と共通し、公夏本は僅か一首にすぎないのである。この例から、切継の過程を想定すると、(イ)公夏本↓宣秀本↓園林本↓流布本の経過か、或は(ロ)公夏本↓園林本↓宣秀本↓流布本、(ハ)園林本↓宣秀本↓公夏本↓流布本、或は(ニ)宣秀本↓園林本↓公夏本↓流布本の四通の仮定があるわけである。ここでは簡単に結論のみ述べると、(イ)の仮定が比較的自然的経過ではないかと想像されるのである。即ち初度本から、思いついた改変が施されたなかに、園林本系の六首が含まれ、宣秀本系に於て四首復活し、更に公夏本系に於て、その六首がもとに復し、別な一首が切り棄てられて、流布本に至り十首すべてが再録されるという順次的な経過ではないかと。可能性から云えば(イ)の仮定は当然考慮される。即ち公夏本系のみの一首及び共通の三首が切出され、宣秀本に於て前者の一首が復活し、別の二首が切出され、更に、園林本系に於て、宣秀本三首を含む六首が切出されたとする推定である。が次の流布本に至って、以上六首に、諸本共通の三首が一挙に復活するというのは、やはり自然的経過とは思われない。(ハ)の場合のように、徹底的な改変の際のこの六首の切棄てとは事情が自ずから異なると思われるのである。寧ろ再録の過程は順次的な推移であつたと。

続いて、この系類の諸本に於て新たに撰入した歌を掲出すると

春部

堀川院の御時百首歌めしけるに春たつ心をつかうまつれる

修理大夫頭季

うちなひき春はきにけり山川の岩まの氷けふやとく覧(一)

庭もせに引つらなれるもろ人の立あるけふや千世のはつ春

源俊頼朝臣

春たちてこすゑにきえぬ白雪はまたきにさける花かとそみる（2）

春宮大夫公実

つらゝゐしほそ谷川のとけゆくはみなかみよりや春はたつ覧（4）

皇后宮肥後

百首歌の中にはつ春の心を人にかはりてよめる

前斎宮内侍

春のくる夜のまの風のいかなれはけさ吹にしも氷とく覧（5）

はつ春の心をよめる

太宰大貳長実

いつしかと春のしるへにたつ物はあしたの原の霞なりけり（6）

春のはしめの心をよめる

藤原顕仲朝臣

いつしかと明行空のかすめるはあまの戸よりや春はたつ覧（3）

源俊頼朝臣

いつしかとすゑの松山かすみあひて浪とゝもにや春はこゆ覧

源俊頼朝臣

梅花散水といへる事をよみ侍ける

ちる花は水の岩間によとむとも香はなかれてやせゝにとまらん

梅花をよめる

源忠季

かきりありてちりははつとも梅花香をはこすゑにのこせそと思(21)

百首歌の中に若菜の心をよめる

源俊頼朝臣

かすかのゝ雪をわかなにつみそへてけふさへ袖のしほれぬるかな

子日の心をよめる

大藏卿匡房

春かすみたちかくせともひめ小松ひくまの野へに我はきにけり(23)

深山花を

摂政左大臣

峯つゝきにほふさくらをしるへにてしらぬ山ちにかゝりぬるかな(47)

山花留人といへることをよめる

大中臣公長朝臣

おのゝえは木のもとにてやくちなまし春にかきらぬさくらなりせは(54)

藤原忠隆

吉野山峯にたなひく白雲とみゆるは花のこすゑ成けり(53)

白川の花さかりなりと聞て人く具して見にまかりたりけるにさかり過て

ちりけるをみてよめる

源俊頼朝臣

身にかへておしむにとまる花ならはけふや我世のかきりならまし(三奏本67)

落花の心をよめる

源俊頼朝臣

山あらし岑こす風にちる花を空ゆく浪とおもひける哉

新院の北面にて残花薫風といへることをよめる

中納言雅定

ちりはてぬ花のありかをしらすれはいとひし風そけふはうれしき（74）

前齋院にて水上落花といへる事をよめる

平忠盛朝臣

水のおもにちりみちにけりさくら花何をか池のしるしにはせん

奈良にて人く百首歌よみけるにさわらひの心をよめる

権僧正永縁

山里は野へのさわらひもえ出るおりにのみこそ人はみえけれ（75）

中納言雅定

のこりなく暮行春をおしむとてこゝろをさへにつくしつるかな（95）（但しこの歌、初度本の巻尾に後人の補写する歌である。）

夏部

大中臣実長

うのはなの青葉もみえすさきぬれは雪には名のみかはる成けり（110）

源俊頼朝臣

時鳥こゑまちつけてきくほとや人に我身のうらやまるらむ（天文四年写公夏本に欠く）

源俊頼朝臣

またすてふ我名はたてし時鳥なきおこしつと人にかたるな

源忠季

たまさかにとふひの杜のこすゑよりなのりて過るほとゝきすかな

なきつともたれにかいはん郭公影より外に人しなけれは

源俊頼朝臣

五月雨は軒のしつくのつくくとふりつむ物は日数なりけり

俊頼朝臣

秋部

野草帶露といへることをよめる

太宰大式長実

まくすはふあたのおほのゝ白露を吹なはらひそ秋のはつ風(166)

待草花心を

皇后宮美濃

藤はかまはやほころひてにほはなん秋のはつかせふきたゝすとも(167)

内大臣

かきりありてわかるゝ時も七夕のなみたの色はかはらさりけり(174)

源俊頼朝臣

帰るさはあさせもあらし天川あかぬ涙に水しまさらは(177)(園林・岡田・九大・統群本に欠く)

月をよめる

皇后宮肥後

月をみて思ふこゝろのまゝならは行ゑもしらすあくかれなまし(200)

人の許にまかりて物申ける程に月の入をみてよめる

源師俊朝臣

いかにしてしからみかけんあまの川なかるゝ月やしはしよとむと(201)

摂政左大臣家にて山月といへる事をよめる

藤原親隆

みわの山杉まもりくる影みれは月こそ秋のしるしなりけれ

月をよめる

藤原忠隆

なかむれはふけ行まゝに雲晴て空ものとかにすめる月かな (213)

源俊頼朝臣

むら雲や月のくまをはのこふらはれ行まゝにてりまさる哉 (218)

月前落葉といへることをよめる

源俊頼朝臣

あらしをや葉守の神もたゝる覧月に紅葉の手向しつれは (230)

深夜聞鹿といへることをよめる

内大臣家越後

夜はにくこゑに心そあくかるゝ我身はしかの妻ならねとも (237)

野草帶露といへることをよめる

皇后宮肥後

白露と人はいへとも野へみれはをく花ことに色そかはれる (241)

女郎花をよめる

藤原顥輔朝臣

しら露やこゝろをく覧女郎花色めく野へに人かよふとて (246)

源俊頼朝臣

さゝかにの糸にかゝれる藤はかまたれをぬしとて人のかるらん

太皇太后宮の扇合に人にかはりて紅葉の心をよめる

源俊頼朝臣

をと山紅葉ちるらし相坂の関のを川にしきをりかく（262）

摂政左大臣家にて落葉をよめる

源俊賴朝臣

あらし山葉守の神もたゝるらん月に紅葉の手向しつれは（園林本・岡田本に見えるが、この歌、両本さきに、月前落葉を源俊賴朝臣 嵐にや葉守の神のたゝるらん月にもみちの手向しつれは、とあり、処を違えて同歌を重複収録したものと思われる。前掲の（230）の歌と同歌である故、こゝには除くべくも、参考までに誌した。）

源師俊朝臣

草のはにはなくきゆる露をしも形見にをきて秋の行らむ（272）

九月尽に大井にまかりてよめる

春宮大夫公実

おしめとも四方の紅葉はちりはてゝとなせそ秋のとまりなりける（273）

（但し右二首、初度本の巻末にある後人の補写に見ゆるが、初度本の歌とは別にして考えるべきであろう。）

冬部

網代をよめる

皇后宮肥後

ひおのよる河せにみゆる網代木はたつ白なみのうつにや有覧（285）

千鳥をよめる

神祇伯頭仲

風はやみとしまかいそをさしまつは夕波千鳥たち鳴也（289）（園林本による、他、岡田本・宣秀本・続類従本にあり）

水鳥をよめる

源家時

あらし吹よはの川なみたかけれはうきねの鶯も夢さめにけり

題不知

源俊頼朝臣

雪ふれは谷のかけ橋うつもれてこするそ冬の山ちなりける

雪の歌とてよめる

源俊頼朝臣

衣てのさえ行まゝにしもとゆふかつらき山に雪はふりつゝ (307)

炭かまをよめる

皇后宮権大夫師時

すみかまにたつ煙さへをの山は雪けの雲とみゆる成けり (309)

選子内親王いつきにおはしましける比雪ふりたりけるに月のあかゝりける夜まいりて女房達を尋ねけるに

ねたりけるにや月も見さりければ殿上のみすにむすひつけて侍ける

藤原兼房朝臣

かきくらし雨ふるよはやいかならん月と雪とはかひなかりけり (312)

神楽の心をよめる

皇后宮権大夫師時

神かきの御室の山に霜ふれはゆふしてかけぬさか木葉そなき (315)

水鳥をよめる

前斎院六条

中くゝに霜のうはきをかさねてや鶯の毛衣さえまざる覧 (317)

依花待春といふことを

内大臣

なにとなく年のくるゝはおしけれと花のゆかりに春を待かな (320) (この歌、初度本の巻末にある例の補写)

中納言国信

なに事をまつとはなしに明くれてことしもけふになりにけるかな (325) (この歌、初度本の巻末にある例の補写)

賀部

花契返年といへることをよめる

源師俊朝臣

よろつ代とさしてもいはしきくら花かさゝん春しかりなければ(330)(この歌、初度本の巻末にある例の補写)

百首歌の中に祝の心をよめる

源俊頼朝臣

君か世は松のうは葉にをく露のつもりて四もの海となるまで(332)(この歌、初度本の巻末にある例の補写)

源俊頼朝臣

おちたきつ八十うち川のはやきせに岩こす波は千世の数かも

松上雪をよめる

源頼家朝臣

よろつ代のためしとみゆる松のうへに雪さへつもる年にもある哉(353)

前斎宮伊勢におはしましける比石なとりの石あはせといへる事をせさせ給けるに祝の心をよめる

源俊頼朝臣

くもりなくとよさかのほる朝日には君そつかへんよろつ世までに(354)(この歌、初度本の巻末にある例の補写)

とあり、各本間には註記した如く僅か一・二例の相違はあるが、ほぼ六十首前後の継入がなされているのである。

その内訳は、春部二十一首、夏部六首(天文四年公夏筆本一首欠)、秋部十七首(宣秀・続類従・園林・岡田本一首欠、又園林・岡田本重複歌一首あり)、冬部十一首(公夏岡本一首欠)、賀部五首である。初奏本からの切出しに較べ、約五十首ほど少くなっているが三代集の著名な作者をすべて除去しての上であれば相当な改修が施されたと考えてよからう。そして、新たな撰入歌は当代の歌人によって占められ、いわば白河院を圍繞する歌壇的な結集の機運がかなりあらわ

に窺われるようにも思われる。(この金葉和歌集撰集過程と院政歌壇の問題は別に稿をあらためることにする。)ともかくも、この途次に於ける歌員の切継はきわだたしいのであるが、同時に従来の勅撰集編纂の形式を―その間の事情の如何にせよ―事実上脱け出ようとする傾向が、この段階に於て歴然となつて表面化し、二度本精撰本へと引継がれてゆくのであるが、この破格な撰述態度には―いづれ三奏本に於て再び崩れ去るにせよ―撰者の意気込みと刻意のあとがそこに感ぜられるのである。この右に掲出した撰入歌は、或いは院の「御覚への人」への考慮などといった様々な背後関係は想像するに余りあるが、また、それぞれは撰者自身の細心な銓考を経たものであろう。その意味では、金葉集はこの段階に於て画期的な機運のもとに新たな時期を迎えたといえる。が同時に、この段階は猶低迷する草案の一時期であつたことは、この切継のあとから―例えば撰者自身の歌をみるに初度本から十数首切出し、別歌二十首近きを自撰し、更に精撰本に於て略々半数を棄却するが如き一例からも窺われるのである。歌によつては二転三転する経過をたどるものもあつたであらう。そして、この機運が一応の完成をみるのは、二度本精撰本を待たねばならない。がしかし、この系類を生む過程にこそ、本集の期を画する撰集方向が開けたと考えられる。煩縷に例示をした理由の一半はそこにある。

八雲御抄に「三ヶ度撰改。以第二度二流布。多近世人。但六帖并道済相模歌等入之云々」と誌すように、二度本に於ても必ずしも当代の作者にかぎらず、道済の如き拾遺の作者をなお含むが(冬部に一首)、ともかくも、この続群書類従初度本系類に於て、金葉集は編纂の基本的な大綱―三代集の作者を切棄て、当代の作者を中心に撰集する方針―は定まり、二度本にと更に修正が施されてゆくのである。現存する初度本が巻五迄にすぎないため、巻六以下の相互の変遷過程は辿るべくもないが、恐らく同様な経過が想定されるのであらう。

さて、このような編集途上にある続群書類従本系であるが、さきに諸本解題で述べた如く、諸本間相互には、猶かなりの異同をとどめている。記述は重複する点もあるが、次に歌員の異同を一括して、諸本の成立關係に就いて言及することにした。伝鳥丸光広本・押小路家本は未見であるので、以下は六本を対称とする。（掲出歌は註記せるもの以外は、奥書のない橋本公夏本文である。歌尾に附した番号は例の如く国歌大観番号である。）

卷一 春部

おなし心をよめる

太宰大貳長実

春ふかみ神なひ河に影みえてうつろひにけり山ふきの花（82）園林・岡田本ナシ

紫藤蔵松といへることをよめる

良運法し

松風のをとせさりせは藤なみをなにかゝれる花としらまし（88）園林・岡田本ナシ

卷二 夏部

尋郭公といへることをよめる

藤原節信

けふも又尋ねくらしつほとゝきすいかてきくへき初音なるらむ（112）園林・岡田本ナシ

源俊頼朝臣

時鳥こゑまちつけてきくほとや人に我身のうらやまるらむ（114）ノ次 天文四年公夏筆本ナシ

藤原忠季

ともしすと山はしづくにそほちつゝ尾上によをもあかしつる哉（園林本）（156）ノ次 公夏両本ナシ

「統群書類従本は藤原基俊歌「夏の夜の月まつほと云々」より藤原季通歌「けふくれはあさのたち枝に云々」まで夏部に四首欠漏、次の秋部冒頭歌春官大夫公実の「とことにはふく夕暮の云々」より皇后宮美濃歌「藤はかまはやはころひて云々」まで三首欠漏あり」

卷三 秋部

源俊頼朝臣

帰るさはあさせもあらし天川あかぬ涙に水しまさは (177) 園林・岡田・宣秀・統類従本ナシ

「統群書類従本は藤原行盛歌「山ふかみとふ人もなき云々」より顯仲卿女歌「もろともに草はの露の云々」迄七首と次の「翫明月といふことを 前中納言伊房」の詞書・作者名を欠漏する」

「統群書類従本、大納言経信歌「こよひわれかつらの里に云々」より参議師頼歌「いにしへのなにはの事を云々」まで八首欠漏あり」

藤原行家朝臣

河霧の立こめつれは高瀬舟分行さほの音のみそする (園林本) (256) 公夏岡本ナシ

紅葉の心をよめる

藤原伊家

谷川にしからみかけよ龍田ひめ岑のもみちにあらしふくなり (263) 園林・岡田・宣秀・統類従本ナシ

摂政左大臣家にて落葉をよめる

源俊頼朝臣

あらし山葉守の神もたゝるらん月に紅葉の手向しつれは (園林本) (266) ノ次 (園林・岡田本にこの歌あるも、(230)に詞書・語句を相違するが、同歌はこの両本ほか四本にもあり)

卷四 冬部

千鳥をよめる

神祇伯頭仲

風はやみとしまかいそをさしまつは夕波千鳥たちゐ鳴也 (園林本) (289)

公夏岡本ナシ

百首歌中に霜を

源俊頼朝臣

すみよしのちきのかたそきゆきもあはて霜置まとふ冬はきにけり (園林本) (289)

ノ次 公夏岡本ナシ

氷をよめる

源俊頼朝臣

(292) ノ次に、園林・岡田本この詞書・作者名あるも歌なし。他四本なし

氷をよませ給へる

三宮

つなかねとなかれもやらすたかせ舟むすふ氷のとけぬかきりは (316)

園林・岡田本ナシ

卷五 賀部

大藏卿匡房

君か世はかきりもあらし三笠山峯の朝日のさゝんかきりは (346)

園林・岡田・宣秀・続類従本ナシ

卷六 別離部

返し

東宮大夫公実

朝日とも月ともわかすつかのまも君を忘るゝ時しなれば (370)

園林・岡田本ナシ

卷八 恋部下

〔続群書類従本は中納言雅定歌「逢事をこよひと思はゝ云々」より修理大夫顕季歌「わきもこかゑたち聞し云々」まで七首

脱漏する」

摂政左大臣家にて恋歌よみけるに

藤原親隆朝臣

しほたるゝ伊せおのあまの袖たにもほすなるひまはありとこそきけ (470) ノ次 園林・岡田・宣秀・続類従本ナシ

題しらす

よみ人しらす

あふ事は夢はかりにてやみにしをさこそ見しかと人にかたるな (474) 園林・岡田本ナシ

物思ひ侍ける比月のあかゝりける夜あかさりし面影つねよりもたへかたうてよめる 橘俊宗女

つれ／＼と思ひそ出る見し人をあかていく月なかめしつらん (494) 園林・岡田・宣秀・続類従本ナシ

題不知

上総侍従

あさましく涙にうかふ我身かな心かろくはおもはさりしを (495) 園林・岡田本ナシ

「男のけふは方たかへに物へまかると申たりければつかはしける 君こそは一夜めくりの神ときけなそあふ事のかたゝかふらん (512)、後朝恋をよめる 藤原顕輔朝臣 梓弓帰るあしたのおもひにはひきくらふへき物のなき哉 (513) の二首続類従本脱漏あり」

〔読人不知〕

うとましや木の下陰のわすれ水いくらの人のかけをみるらむ (531) 園林・岡田本ナシ

恋の歌とてよめる

春宮大夫公実

逢事はふな人よはみこく舟のみおさかのほる心ちこそすれ (544) 園林・岡田本ナシ

俊忠卿家にて恋歌十首人／＼よみけるにおとしめてあはすといへることをよめる

〔源俊賴朝臣〕（流布本ニヨル）

あやしきもうれしかりけりおとしむるそのことのはにかゝると思へは（550）園林・岡田・宣秀・続類従本ナシ

巻九 雑部上

山寺に月のあかゝりける夜経のたうときを聞て涙のおちければよめる 平康定女

いかてかはたもとに月のやとらましひかり待けるなみたならずは（572）園林・岡田・宣秀・続類従本ナシ

石山にまいりけるに大津にとまりて夜ふけてきゝければ人のけはひあまたしてのゝしりけるを尋ねければ

あやしのしつのめかよねしらけ侍るなりと申けるをきゝてよめる 和泉式部

驚のゐる松原いかにさはく覧しらけはうたて里とよみけり（592）天文四年公夏筆本ナシ

御返し 上東門院御堂女

すきにける月日のほともしられつゝこのみを見るもあはれなるかな（599）園林・岡田本ナシ

殿上おりたりける比人の殿上しけるをきゝてよめる 源行宗朝臣

うらやまし雲のかけ橋たち帰り二たひのほる道をしらはや（606）園林・岡田本ナシ

殿上ましけるにえせさりければよめる 平忠盛朝臣

思きや雲井の月をよそにみて心のやみにまどふへしとは（607）園林・岡田本ナシ

皇后宮美濃

よなくはまとろまでのみ有明のつきせす物をおもふころかな（621）宣秀・続類従本ナシ

返し 賀茂成助

住吉のまつかひありて今日よりはなにはの事もしらすはかりそ (630) 園林・岡田・宣秀・続類従本ナシ
卷十 雑部下

返し

知信朝臣

世繼ニハ此贈答相連シタリ
虫の音はこの秋しもそ鳴まざるわかれちとをくなる心ちして (648) 園林・岡田・宣秀・続類従本ナシ
衆罪如霜露といへることをよめる 覺誓法し

つみはしも露ものこらすきえぬらんかき夜すからくゆる思ひに (675) 園林・岡田本ナシ

龍女成仏をよめる

勝紹〔超〕法師

わたつ海の底のみくつとみし物をいかてか空の月とみるらむ (宣秀本) (679) 公夏両本・岡田・園林本ナシ
醍醐の釈迦会に花のちるをみてよめる 珍海法師母

けふも猶おしみやせまし法のためちらす花そと思ひなさすは (687) 園林・岡田本ナシ

極楽をおもふといへることを

源師俊朝臣

四方の海の波にたゝよふみくつをもなゝへの網にひきなもらしそ (686) 宣秀・続類従本ナシ

〔続類従本は連歌部に、(707)(708)(709)(710)の四首を脱漏する〕

右の異同を次に集約すると(但し続類従本の關落部分は宣秀本系からの転写の途路に於ける誤脱とみて、この場合無視する)、
次の如くなる。即ち

(1)公夏筆両本に無く他四本に収録する歌―忠季歌(156)ノ次・行家歌(256)・神祇伯頭仲歌(289)・俊頼歌(289)ノ次)の四首。

(ロ)天文四年公夏筆写本に欠き他五本に収録する歌—俊頼歌(114)ノ次・和泉式部歌(592)の二首。

(ハ)宣秀本・続類従本両本に無く他四本に収録する歌—皇后宮美濃歌(621)・師俊歌(686)の二首。

(ニ)園林本・岡田本両本に無く他四本に収録する歌—長実歌(82)・良暹法師歌(88)・節信歌(112)・三宮歌(316)・公実歌(370)・よみ人しらず(474)・上総侍従(495)・読人不知歌(531)・公実歌(544)・上東門院歌(599)・行宗歌(606)・忠盛歌(607)・覺誓法師歌(675)・珍海法師歌(687)の十四首。

(ホ)園林本・岡田本・宣秀本・続類従本の四本に無く公夏筆両本に収録する歌—俊頼歌(177)・伊家歌(263)・匡房歌(346)・親隆歌(470)ノ次・俊宗女歌(494)・「俊頼歌」(550)・康定女歌(572)・成助歌(630)・知信歌(648)の九首。

(ヘ)公夏筆両本・宣秀本・続類従本の四本に無く園林本・岡田本に収録する歌—俊頼歌(266)ノ次、あらし山云々は但し重複歌・俊頼歌(292)ノ次、但し詞書・作者のみで歌欠)の二首。

(ト)公夏筆両本・園林本・岡田本に無く宣秀本・続類従本に収録する歌—勝超法師歌(679)の一首。

である。この集約の結果から、(一)公夏筆両本系統、(二)宣秀・続類従本系統、(三)園林本系統に明らかに系統が識別されるのは、さきの諸本の項に於て述べた如くである。(たゞ、(ロ)の如きは何か特殊な事情が背後にあるのであろう)。そして(一)の公夏本系は、(二)宣秀本系・(三)園林本系に対し独自の系統をたてていることが判り、この諸本相互の未載歌の異同に於ては、(ト)の一首が園林本系と共通して欠き、(ハ)の二首は逆に園林本系と共に載録する類似性を僅か見出すにすぎない。(ヘ)の二首如きは、一首は重複歌であり、他の一首は詞書・作者のみで歌がなく、重複歌同様この系統の伝本に於ける誤写かとも思われるので、相互の関係は極めて疎遠であると云わねばならない。これに較べると、宣秀本系・園林本系は、(ロ)の如き九首にのぼる共通現象が見出され、或は(イ)の如き四首の共有現象があつて、両者の間は公夏本

に比し、異同の上では近似關係が存在するのである。而し、それも(二)の十四首の如き園林本系の特有性があり、(イ)(ハ)の如きわずかながらではあるが、宣秀本系の独自性は相互の間に散見されるのである。従つて、ここでは(ロ)(ヘ)の如の如き特殊な問題は一応除去して、この三系統に類別して稿をすすめることにする。

さて、園林本系はこのなかで歌数は最も少なく、公夏本系の載録する歌二十三首を欠き、宣秀本は、同じく公夏本の歌を十一首を欠くこととなる。これに対し、公夏本は園林本系・宣秀本系の歌四首を欠いている。その内訳をみると、園林本系未載歌二十三首は藤原親隆の歌を除きすべてが流布本(版本系)に於て収録されている歌である。また、宣秀本系十一首は二首(美濃歌(621)・師俊歌(686))以外前者と重複するからこの親隆歌を除く十首が流布本に見出れるのである。これらに較べ公夏本系の僅か四首中の二首が流布本に採録されているにすぎない。この事は三系統の成立過程を推定する上に重要な示唆を与えるものと思われる。

まず、さきの歌員の排列順序等から導き出された結果(橋本公夏本解題の処に述べてある)に沿つて、この場合も、園林本系→宣秀本系→公夏本系と経過を仮定して推論すると、この園林本系未載歌二十三首は、そのうち右の十四首(二)項の歌)が宣秀本系成立の過程で撰入され、更に(ト)の一首勝超法師歌もこの時に入首して、残りの九首が公夏本系成立の期に撰入されたという経過となる。ただ公夏本系成立期にさきの勝超法師歌と(イ)の項の二首とが棄却されて、その後流布本に於て再び復活したものと想定されるのである。右の三首を除けば、推移過程は比較的自然な経過と考えられる。しかも、この三首―行家歌(256)・神祇伯頭仲歌(289)・勝超法師歌(679)―は現存する二度本諸本では、その過半が、寧ろ板本系をのぞく殆どが載録せずに撰歌の上では最後まで入撰を迷った感を残す歌である。因みに、伝存本中、鎌倉期から南北朝期の筆写になる、正宗文庫旧蔵本の、伝慈鎮筆本・伝為家筆本(巻七以下の伝為家本も(679)欠)・

伝為明筆本・伝為忠筆本や、尊經閣藏伝為遠筆本などの最古鈔本などにはいずれも、この三首を欠く。或いは書陵部蔵伝為家筆本・吉田幸一氏蔵伝兼好筆本などには、勝超法師歌をとどめるが他二首を切出しているなど、精撰本に至る途次に於て刪除されているのをみても判る。いずれにせよ、この三首は撰歌の次第は流動的であつたといえる。とすれば、右の仮定は極めて無理のない撰入経過と考えられるのである。

それでは、一方この反対の過程を想定してみると―公夏筆本系↓宣秀本系↓園林本系↓流布本系の流れであり、本集の場合特に歌数多き伝本より歌数少なき伝本への移行は常識的には妥当性あるものと考えられるが―まず公夏本系成立時点では、さきの二十三首はいずれも載録されているが、(イ)項の二首及び勝超法師歌の三首を欠いて、次の宣秀本系の処で二十三首中の九首が切出され、代りに前の三首(イ)項二首と勝超歌)が選入し(但し(256)の行家歌は初度本にあるので再び復活したわけである)、その次の園林本系の時点に至つて、残りの十四首すべて棄却されると共に撰入した勝超歌は再び切棄てられることとなる。そして更に流布本に於て、この二十三首中、流布本未載の親隆歌を除く二十二首及び勝超法師歌は二転三転してすべてが復活するという甚だ無理困難な経過を推測せねばならないのである。このほか組合せの上では猶数通りの過程を仮説し得るが、前にも触れておいたように、孰れ徒らな推理にすぎないのである。従つて、ここに於ても、既述した結論と同様の推定を導き出すのが、最も妥当性ある、自然な帰着であると思われるのである。即ち、園林本系から宣秀本系へ、更に公夏本系へと辿る撰集草案の経過である。初奏本に施された決定的な撰集方針の変更にとまらう第一次の草稿が修正を加えながら序々にふくらみ、定稿に至る内容を更に充足してゆく過程を、これら諸本にみる異同は示唆するのではなからうか。猶、右の歌については初奏本から、この系類への過程に於ても同様な考察がなされるべきであるが、ほぼ同一な結果が推測されることは前項で略述した如く

である。また諸本間の歌順の異同からの考察は、公夏筆本の解題の処に一括したので併せ参照されたい。(猶い項に就いては煩雑をさけ省略した。)

次に、既述の諸本と関連する伝本に、三奏本ではあるが、南北朝期頃書写の古鈔本伝二条為遠本^註(吉田幸一氏蔵)がある。(なお、この系統の転写本には近世書写の数本があるが、いずれも僅かの相違が散見されるにとどまる)。この伝為遠本には三奏本文の上欄・行間余白に二百六十一首に及ぶ片仮名交り文の書入^註があり、「イ本有此等」と註記するをみると、この欄外歌は三奏本との異同を掲出したものであらう。イ本は今迄のところ同系の伝本は存在しないのであるが、前記諸本と比較するに――欄外歌は三奏本との校異であるから、二百六十一首に限る比較は妥当なものは云えないが――その過半が一致するところから、恐らくこの欄外歌は前記諸本の系類に近似する性格のもの、或はこれに近い系統本に依拠したのではないかと推定される。而し、猶以下の如く、欄外歌独自の歌を持っていて、この対校本を特定の一本に限るとも云い難い一面もあり、前記諸本と同一に扱うことは困難である。以下前記諸本に未載の歌をあげると、

春

左兵衛督伊通

シラクモトミネニハミエテサクラハナハルレハフモトユキトコソミレ(初度本⁶⁰、以下初⁽⁶⁰⁾トス。流布本⁽⁷²⁾、以下⁽⁷²⁾トノミ記ス)

夏

藤原忠兼

トモシストヤマノシツクニソホチツ、ヲノヘニ夜ヲモアカシツルカナ 初216(公夏両本欠)

秋

勝語〔超〕法師

コヒワタルナミタニフチトナリハテ、アフセマレナルアマノカハカナ 初241

〔源俊頼〕

カヘルサハアサセモアラシアマノカハアカヌナミタニミツシマサラハ (177) (園林・岡田・宣秀・続類従本欠)

冬

神祇伯頭仲

カセハヤミトシカイソヲコキマヘハユフナミチトリタチナクナリ (289) (公夏岡本欠)

百首歌ノ中ニシモヲヨメル

俊頼朝臣

スミヨシノチキノカタソキユキモアハテシモヲキマヨフフユハキニ〔ケリ〕 初400 (公夏岡本欠)

別離

百首歌中ニ別心ヲ

俊頼朝臣

ワスルナヨカエルヤマチニアトタヘテヒカスハユキノフリツモルトモ

シリタルワラハヘノハルカナルトコロヘマカリケルニ装束テウシテツカハストテヨメル

法橋有禅

ワカレチノクサハヲワケンタヒコロモオモヒタツヨリヌル、ソテカナ

恋上

摂政左大臣家ニテ恋心ヲ

藤原為真

アフコトノナキヲウキタノモリニス(ムカ)ンヨフコトリコソワカミナリケレ(712)

藤原親隆

コイシナチ心ツクシテイマヽテニタノムレハコソイキノマツハラ(713)

山ノ哥合ニコヒヲヨメル

隆覚法師

身ノホトヲオモヒシリヌルコトノミヤツレナキ人ノナサケナルラン(714)

藤原秀道朝臣

摂政左大臣家ニテ恋哥トテヨメル

ナケキアマリウキミソイマハナツカシキキムヘモノヲオモフトヲモヘハ

初恋ノ心ヲ

藤原資光

心ニハシカウミカケテオモヘトモソフシカタキハシラカハノミツ

山哥合ニ忍恋ノ心ヲヨメル

隆恵法し

カクトタニイハテハカナクコヒシキハヤカテモシラヌ身トヤナリナン

忍恋トイフコトヲ

神祇伯顯仲

シラセハヤタマシクニハニソテヒチテナヽセノヨトニヲモフコヽロヲ(409)

寄梅花恋ヲヨメル

ムメノハナキミカニホヒニカハラネハチルハワカレシコヽチコソスレ

摂政左大臣家ニテ人々哥ヨミ侍ケルニ

源盛家朝臣

キミコフトイハマノミツノモラセトモナカレテスマヌナケキヲソスル

此哥如此二首ツ、ケリ□□相模(二字不明)
アリフルモウキミナリケリナカ、ラヌ人ノ心ヲイノチトモカナ (415)

藏人ニテ侍ケル時カタラヒケル人ノコト人ニモノ申トキ、テウツロハヌ
キクノハナニサシテツカハシケル

源家時

シモヲカヌ人ノ心モウツロヒテヲモカハリセヌシラキクノハナ

カヘシ女ニカハリテ

春宮大夫公実

シラキクノカハラヌイロモタノマレスウツロハテヤムアキシナケレハ (420)

ヒサシクヲトツレヌ人ノマタワスレヌヨシヲ申タリケレハ

高尊法師

ワスレストイフニツケテソナカ、ニトハレヌカスノヘケルトハシル

恋ノ心ヲヨメル

林資〔琳賢〕法師

アクトイフコトヲシラハヤクレナヒノナミタニソムルソテヤカヘルト (715)

有下此哥
題不知

相模

スミヨシノフルエニタテルミヲツクシフカキニマケヌコトハアラシナ

月ニヨスル恋ヲヨメル

藤原為忠

ヨヒノマニホノカニ人ヲミカツキノアカテイリニシカケソコヒシキ (485)

摂政左大臣家ニテ恋ノ心ヲ

藤原重基

キミユエニカキアツメテシモシヲクサハテハオモヒノケフリトソナル

寄浜恋トイフコトヲヨメル

藤原親隆

サモコソハミルメカタ、ノハマナラメヲトタニタテヨシカノウラナミ

恋ノ心ヲヨメル

行眞法師

コヒワヒテカヘスコロモハウミナレヤウラニナミタノカ、ルトオモヘハ

撰政左大臣家ニテ寄花恋トイヘルコトヲヨメル

源雅光

フクカセニタヘヌコスヘノハナヨリモト、メカタキハナミタナリケリ (443)

雑上

丹波ニテアマノハシタテヲミテ

赤染

ヲモフコトナクテヤミマシヨサノウミノアマノハシタテミヤコナリセハ

註三

返し

カモノナリスケ

スミヨシノマツカヒアリテケフヨリハナニワノコトモシラスハカリソ (630) (園林・岡田・宣秀・統頼従本欠)

等の三十首乃至二十五首 (前記諸本の歌数相違による) を数えるのである。そのうちわけはすでに初度本に見出す歌四首 (伊通歌は初・二度両本に見ゆ)、二度本 (八代集抄) に載録する歌十二首と先の伊通歌であり、この欄外歌中に見出す散見する歌が十四首ある。

此の十四首の (うち一首は闕名歌) 作者であるが、相模・赤染等の拾遺・後拾遺の作者、俊頼は云うまでもなく、法橋有禅・藤原秀道 (季通の誤りか、この歌千載集(885)にあり)・隆恵法師・源家時・藤原重基・藤原親隆等 (各一首) はいずれも詞花集の作者である。藤原資光は永久二年八月十五夜内裏歌合の作者と推定され、^{註四}荻谷朴氏の平安朝歌大成の考証によると、永保三年に生れ長承元年二月十七日 (五十歳) に卒去している。又藤原盛家は淡路守盛長の男とし

て、延久二年に生れ、永久・元永年間の内大臣忠通の主催する歌合の常連の一人であり、この歌合の判者が俊頼・基俊・顕季などであることから、盛家歌の撰入は当然考えられる。天治二年二月廿日註五に奇しくも卒去している。次に行真法師は保安三年二月五日無動寺歌合・天治元年五月無動寺歌合等の作者と推定される。註七伝記は未詳であるが以上三人は共に当代の歌人であり、本集入撰の機会にあったわけである。ただ高尊法師（黒川文庫旧蔵三奏本は〇慶法師とある由であるが）については調査不行届きか、その伝記を詳らかにしない。がいずれにしても此の十四首は相模・赤染の歌を除けば撰者とはほぼ同時代人の歌であり、撰入する資格や可能性は充分にあったわけである。

又、二度本にみえる十二首のうち四首は八代集抄巻末に附載する異本歌五首のなかの四首（直イ抄712）藤原為真・（713）藤原親隆・（714）隆覚法師・（715）林資法師歌）である。抄に卷七恋歌上の異本歌と註記するのと同様である。初度本に於ける有

無は憶測すべくもないが、この続群書類従本系になく、この欄外歌に収載されているのは、どう理解すべきであろうか。而も二度本の諸伝本のなかには分散的ではあるが、ままだ散見するところを見ると所謂二度本以前に入集した歌で

あることは確かであろうし、或いは続類従本系以後の撰入も考えられなくもない。この作者四人はいずれも当代の歌合に屢々出場した著名な歌人であり、詞花集（各一首）以下に入集している。因みに親隆の歌「コイシナテ心ツクシ註九

テ」は保安二年九月十二日関白内大臣忠通歌合（基俊判）十二番左歌で為真の歌と合わせている。隆覚法師の「身ノホトヲオモヒシリヌル」は天仁二年三月比叡山歌合の提出歌と推定される。又、右の初度本のみに見える四首の作者、伊通・勝超法師・俊頼の三人は二度本作者であり、忠兼歌は公夏筆両本にのみ欠くにすぎない。この忠兼であるが、初度本に忠兼とあるほか、宣秀本・続類従本・園林本・岡田本は忠季とある。忠季とすれば神祇伯頭仲の男であり、二度本に三首入集しているその人となる。忠兼ならば「五位小式。伯耆守隆忠男。至永久三年」（勅撰作者部類）

とある詞花・新拾遺の作者であつて、いずれにせよ当代の歌人と云える。このほか相模・赤染衛門であるが、前者は後拾遺以下の作者であるも二度本（四首）の作者であつて、赤染衛門だけが三代集作者となるのである。―この赤染衛門の「ヨモフコトナクテヤミマシ…」は伝良経本・続類従本（三奏本）は誤つて馬内侍歌として撰入しているが―。

さて、こうみてくると、赤染衛門歌を除くといずれも、初奏本棄却以後に撰集された歌とするのも少しもさしきわらないわけである。赤染衛門歌一首にしても、同じく拾遺の作者、源道済が二度本冬部に入集しているのであるから、とりたてて例外と云うこともあるまい。とすると、初度本破棄後のある時期、続類従本系類に無いのであるから、恐らくそれ以後に於てこれらの歌は撰入された（初度本にみる四首再撰）と推定することも、あながち牽強附会な推理ではあるまいと思われる。そして為遠本に云うイ本が一本であるならば―数種の校本を用いたという積極的理由もないことであるし、また既述したように矛盾する要因もないのであるから―その本はすくなくとも続類従本系類に較べ、掲出の三十首乃至二十五首の歌を別に集録していたと推論されるのであるが、現存伝本中には、そのような本がない。そこで当然考え付くのは、掲出歌は離別歌以後の歌が多いことである。即ち現存する初度本の散佚部分卷六以下に当ることであり、その散佚した巻々のなかに載録されていた歌がかかる形態で伝存したのではないかと想像されるのであるが、右の欄外歌のみに見出す十四首にしてみても、その殆どが二度本金葉作者としての可能性をもつ当代の作者が占めるので、むしろ、この三十首ほどの歌は、初奏本以後、いずれかの過程で撰入されたと推定するのが妥当性があるう。初奏本以後とすれば、従つてその時期は続群書類従本系類成立以後、二度本成立以前の間が比較的自然な類推で、更に新たに入集或は再撰入した歌が二十数首を数えると推論することが出来るのではなからうか。確証のない、これも類推にすぎないので贅言はさけるが、伝為遠本の欄外歌は、この草案期の撰集過程に新たな資料を提

供すると共に流動する撰集事情をも語っているであろう。

掲出歌のなかで、以後の勅撰集に入集した歌を一瞥すると、俊賴歌「ワスルナヨ云々」(千載集離別)、有禪歌「ワカレチノ云々」(詞花集別)、秀道「季通」「ナケキアマリ云々」(千載集恋四)、隆恵法師歌「カクトタニ云々」(詞花集恋上)、家時歌「シモヲカヌ云々」(詞花集恋上)、雅光歌「フクカセニ云々」(千載集恋四)等多きが散見する。これも、また草稿期故の事情からであらうか。

註一 吉田幸一氏「三奏本金葉集の新出本とその意義——良經筆本の補闕資料としての二条為遠本について——」(東洋大学紀要第六輯)に詳しいので、奥書のみ註記する。「承元五年二月二日書写之勝命所進／本也此本世以希物也殊可秘／」光阿弥陀

本奥書云

仏／抑此集者自白河院御讓位之末／俊賴朝臣奉院宣撰之天治元年／奉勅大治元二之間此集本不定也／奏覽之处兩度返給之初

度進覽／本一番哥ニハ三宮御哥也

トシノウチニハルタチクレハヒト／セニ／フタ／ヒマタルウクヒスノコエ

第二度進覽之本一番哥顯季作也

ウチナヒキハルハキニケリヤマカハノ／イハマノコホリケフヤトクラム

此本世間流布也已上二ケ度皆返給了／第三度奏覽本一番哥者重之作也

ヨシノヤマミネノシラユキイツキエテ／ケサハカスミノタチカハルラム

今度進覽之本無_レ左_レ右被_レ納了／以_レ撰者之自筆_ヲ書造紙_{云々}件_々本者／拾遺集 玄々集哥等多_ク以_レ入_レ之／当本既_ニ是也雖_レ可_レ書_ニ子細_ニ依_レ有_レ所_ノ秘不_レ記_之

文治三年四月十四日書写之云々／同年五月八日付系図了於今／本者少々略了云々

とある。前掲、三奏本伝良經筆奥書との間に多少の異同をみる。為遠本と称するのは古筆了観の極、「二条家為遠卿金葉和歌集四

羊本^墨」とあるによるのであろう。為遠真筆如何は詳らかでないが、南北朝を下らざる古鈔本である。

註二 この二六一首の内訳は、春四九首、夏四二首、秋五二首、冬二十首、賀六首、別離五首、恋上四七首、恋下二六首、雑上十三、雑下一首である。

註三 掲出歌は伝良経本・統類従本の三奏本には馬内侍歌として、後拾遺十六にある馬内侍の「はるさめのふるめかしくも云々」の代りに誤り記載されている。(上掲吉田氏論文による)

註四 夫木抄卷十八に「永久二年名月内裏歌合 八重雲 藤原資光 八重雲も風吹く空はなびきけり恋の煙ぞやるかたもなき」とある副文献唯一の資料を基に荻谷朴氏はこの歌合を推定された。そして作者資光については「歌合史上これが唯一の所見であるが、尊卑分脈北家藤原氏内麿流四ノ二五に、右中弁有信の男として見える正五位下中宮大進式部権少輔大学頭資光が相当するであらう」と記す。又中右記長承元年二月十七日条に「今朝蔵入大学頭資光卒去、年五十。資光者、故右中弁有信朝臣三男、母実政相公女也。遂大業、経蔵人、又還昇補五位蔵人。此三ヶ年依風病籠居、遂以卒去。年来与予如父子契。誠以哀哉。」とある記事より逆算した生年である。本歌合当時三十二歳。

註五 中右記目録、天治二年二月廿日に「主殿頭源盛家朝臣卒去^{五十}」とあるによる。又同氏の調査によると、中右記天永三年二月十九日の条に、盛家が中納言忠通家司の職事となったことが見える。

註六 この歌合は同氏は、今撰集・夫木抄・袋草紙に逸存する副資料から推定されたものである。袋草紙下巻「無動寺歌合^{保安三年二月} 俊頼基俊 桜 左負 僧行真 里も荒れよ人も旧りよ山桜みてこそ斧の柄をも朽たさめ…… 俊頼云、『花は咲きそめては程なし。

斧の柄の朽ちむ、あまりなり。』とて右勝。基俊同難^レ之。但為^レ持。」とあるのや、和歌口伝に「別山桜あかず見つや斧の柄の千たびも花の蔭に朽ちなで。無動寺歌合^{保安二年二月}、僧行真、此心詞を詠ぜり。俊頼朝臣判云『花咲きそめて程なし。斧の柄朽たすあまりなり。』とて負畢。基俊判同^レ之」の記をあげているのをみても判るように、俊頼・基俊等とは親近の間柄を想像される。

註七 夫木抄佚存歌五首から推定された歌合である。行真法師は卷八に「うば玉の夜川の舟の篝火には藻にすむ魚のかくれなきかな」の一首を残す。

註八 為真・親隆・隆覚法師・琳賢法師の歌四首は、所謂二度本中、例えば書陵部蔵元禄元年右京兆尹坂上筆写本・高松家蔵〔江戸初〕写文明十年藤原教国奥書本・東洋文庫蔵文明十年藤原教国奥書本等にも収載されている。

註九 藤原為真、又為実とも書かれている。勅撰作者部類には「五位肥後守。信濃守藤原永実男。詞花雜上」千載恋四」とある。が永久三年十月中務権大輔頭輔歌合以下、前後十ヶ度に出詠している著名な歌人である。

藤原親隆、勅撰作者部類に「正三位参議。大藏卿藤原為房男」とある。詞花1、千載9首以下、新古・新勅・統古・玉葉・新統古に各一首入集する。永万元年八月廿三日（六十八歳）薨（公卿補任）。掲出歌は保安二年九月十二日関白内大臣忠通歌合の出詠である。判者基俊の、当座の判・後日の判を残す。此歌の判詞は「左の『心つくしの生の松原』は、『芦の屋のかりそめ臥し』（為真歌）には、恋の心も歌の姿もまさりてぞおぼえ侍る。左歌、すこぶるよろしく侍り。右歌もよけれども、なほ左勝とや申すべからむ」とあり。俊頼没後、長承三年九月十三日中宮亮頭輔歌合などにも出詠している。共に基俊判であることは注意される。

隆覚法師、勅撰作者部類に「阿闍梨。大納言隆国子。金葉恋上」とあり、抄に「六条右府頭房子、興福寺僧正」とある。荻谷氏によれば、このほか、皇后宮権大夫良経の男の阿闍梨隆覚、伯耆守隆忠の男で山門の阿闍梨隆覚等を挙げて、就中北家末茂流の隆忠男を最も適当な人物と推定されている。掲出歌とその詞書を天仁二年三月比叡山歌合の傍証文献としている。

林資法師とあるが、抄ほか琳賢とある通りであろう。勅撰作者部類に「法師・橘義濟子」とあり、金葉・詞花・千載に各一首入集している。天仁二年十一月修理大夫頭季歌合以下永久四年雲居寺結縁経後宴歌合など、前後十ヶ度近く出詠している。

以上、初度本から続群書類従系の諸本に就いて撰述過程を粗述してきたのであるが、ここで更に所謂二度本への変遷の経過を一覧しておくことにする。それは初度本から、この系類への著しい切継とは質的な相違はあるが、猶歌数に於ける極めて顕著な異同は前者につぐものである。そこでまず、この系類から流布本（版本系）に至る段階までに切り出された歌を拾い出して次に挙げることにする。比較に際しては例の如く便宜上、この系類で歌数の最も多い橋本文夏筆の一本（無奥書本）を以て代表することにするが、諸本間各々相互に異同歌があるので以下の方法をとることにする。（一）公夏本以下諸本共通して存する歌は公夏本を以て掲出した。（二）公夏本に欠く歌については、園林本・宣秀本によって補い、それぞれ註記する。この場合は次の如く、（イ）園林本・岡田本二本にあり他四本に欠く異同歌、（ロ）園林本・岡田本・宣秀本・続類従本四本にあり公夏両本に欠く異同歌、（ハ）宣秀本・続類従本の二本にあり、他四本に欠く異同歌などである。又（ニ）は参考までに掲出したのであるが、公夏本に存する歌であるも他五本間には存否いずれかの異同があつて、而もその殆どが流布本のなかに散見され、正確にはこの流布本の過程で切棄られた歌とはいえないが、いずれにしても、この系類の撰述過程に於ける切継であり、孰れの途次で撰入されたか、或いは切り出されたものかは既述した仮定的な推論を出ないので、それを考え合せ、重複のきらいはあるが並記したものである。それは（イ）園林本・岡田本両本のみに欠ける歌、（ロ）宣秀本・続類従本両本のみに欠ける歌、（ハ）公夏一本（奥書本）のみに欠ける歌、（ニ）園林本・岡田本・宣秀本・続類従本四本共通して欠ける歌等である。（ニ）は表記上前者とは区別して、「一」圏内に註記するかたちをとることにした。但し、続群書類従本の欠漏歌は宣秀本系の明らかな誤脱とみなし、例の如く無視した。また、歌尾に附した、初（一）（ハ）圏内の番号はそれぞれ初度本の歌順番号・国歌大観番号である。

卷一 春部

一五二

庭もせに引つらなれるもろ人の立ゐるけふや千世のはつ春

源俊頼朝臣

春從東来といへることをよめる

覺雅法師

みちのくの衣の関をけさたちていつのまにかは春のきつらむ 初(2)

源俊頼朝臣

いつしかとすゑの松山かすみあひて浪とゝもにや春はこゆ覧

おなじ心を

藤原為真

鶯の梅の花かさちりぬれはふる春雨にそほちてそなく 初(19)

関路関鶯といへる心を

藤原顥頼朝臣

相坂にけふもとまりぬうくひすのなく一声や春の関もり 初(23)

梅花散水といへる事をよみ侍ける

源俊頼朝臣

ちる花は水の岩間によとむとも香はなかれてやせゝにとまらん

百首歌の中に若菜の心をよめる

源俊頼朝臣

かすかのゝ雪をわかなにつみそへてけふさへ袖のしほれぬるかな

忠能卿家歌合に柳の心を

よみ人しらす

谷風の吹あけにたてる玉柳枝のいとまもみえぬ春かな 初(38)

長家卿家歌合によめる

源季遠

いかなれは氷はとくる春風にむすほゝるらん春柳のいと初（40）

百首歌中に柳をよめる

源俊賴朝臣

もかり舟ほつゝしめなはこゝろせよ川そひ柳風になみよる初（39）

静念法し

山ひこのこたへさりせはよふことりむなしき音をや鳴て過まし初（42）

雅家卿家歌合に帰雁をよめる

意尊法し

玉札をかけしおりにやかしかねに春帰りこと契りそめけん初（46）

帰雁をよめる

源忠季

中くちるをみしと思ふらん花のさかりにかへるかりかね初（47）

雪のふる日帰雁をきゝてよめる

慶経法し

ゆきかゝる雲ちは春もさえければかすみの衣きてかへる雁初（50）

鞍馬寺大門の花さかりなりとて下てよめる

永慶法し

山さくら峯はかすみのこめつればふもとの花をおりてこそみれ初（74）

醍醐にまかりたりけるに清滝に花のちりかゝりたりけるか岸には雪のやうに

つもりて水にはつもらさりけるをみてよめる

瞻西上人

ちる花のなかるゝ水につもらぬもそれさへ雪のこゝちこそすれ初（78）

円融院にあまたまかりて翫花といへる事をよめる

中納言顯隆

ちれば雪ちらねは雲とみえつるはさかりににほふさくら成けり初(85)

覚樹法し

岑にちるさくらは谷の埋木に又さく花となりにけるかな初(92)

白川の花さかりなりと聞て人く具して見にまかりたりけるにさかり過て

ちりけるをみてよめる

源俊頼朝臣

身にかへておしむにとまる花ならはけふや我世のかきりならまし三(67)

落花の心をよめる

源俊頼朝臣

山あらし岑こす風にちる花を空ゆく浪とおもひける哉

前齋院にて水上落花といへる事をよめる

平忠盛朝臣

水のおもにちりみちにけりさくら花何をか池のしるしにはせん

春駒の心をよめる

藤原盛経

とりつなく人もなきのゝ春駒はかすみにのみやたなひかる覧初(109)

「おなし心をよめる 太宰大貳長実 春ふかみ神なひ河に影みえてうつろひにけり山ふきの花(82)(岡田本・園林本この歌を無し)」

「紫藤蔵松といへることをよめる 良邊法し 松風のをとせさりせは藤なみをなにくかゝれる花としらまし(88) 岡田本・園林本この歌を欠く)」

園林本この歌を欠く)

卷二 夏部

おなし心をよめる

皇后宮肥後

春はいかに契りをきてか過ぬるとをくれてにほふ花にとはゝや初(143)

鳥羽殿歌合に卯花をよめる

藤原季通

みる人のたちしとまれば卯花のさけるかきねやしら川の関初(155)

〔尋郭公といへることをよめる 藤原節信 けふも又尋ねくらしつほとゝきすいかてきくへき初音なるらむ (112) (この歌、

岡田本・園林本に無し)〕

〔源俊頼朝臣 時鳥こゑまちつけてきくほとや人に我身のうらやまるらむ (この歌、公夏筆天文四年筆写本に欠く)〕

藤原重基

住吉のまつとしりせはほとゝきすうらみぬさきにをとはしてまし初(161)

雲外郭公といへるこゝろを

空になる心のきかはほとゝきす雲のよそには思はさらまし初(171)

郭公といふことをよめる

清原祐隆

みわの山すきかてになけ時鳥尋ぬるけふのしるしと思はん初(172)

源俊頼朝臣

またすてふ我名はたてし時鳥なきおこしつと人にかたるな

源忠季

たまさかにとふひの杜のこすゑよりなのりて過るほとゝきすかな

源俊頼朝臣

時鳥まつ夜の数はかさなれと声はつもらぬ物にそありける 初(180)

独聞郭公を

藤原為忠

ね覚する人もしあらは時鳥これはきくやとはまし物を 初(189)

源俊頼朝臣

なきつともたれにかいはん郭公影より外に人しなけれは

俊頼朝臣

五月雨は軒のしつくのつくく〜とふりつむ物は日数なりけり

清原祐隆

夏月如秋といへることをよめる

五月雨のはれまの月のさやけきは秋の空にもをとらさりけり 初(207)

藤原忠季

ともしすと山はしづくにそほちつゝ尾上によをもあかしつる哉(園林本による、他岡田本・宣秀本・続類従本にあり)

緑樹蔵月といへることを

月影の青葉か下にもりこねは木からしふかん秋をこそまで 初(225)

公実卿家にて対水待月といへることをよめる

源俊頼朝臣

山のはを玉江の水にうつしもて月をは浪の下にまつかな 初(228)

六月祓の心を

源有政

御祓する河せにたてるいくゐさへすかぬきかけてみゆるけふ哉 初 (230)

六月祓のこゝろを

藤原季通

けふくれはあさのたち枝にゆふかけて夏みな月のみそきをそする 初 (232)

卷三 秋部

中納言実行

心をもかす物ならはたなはたのあふをはよそにおもはさらまし 初 (235)

宗延法し

天川君わたりなはかさゝきの橋うちみたるなみもたゝなん 初 (236)

摂政左大臣家にて七夕の心をよめる

藤原時正

ひこ星のたきつの波に舟出する心のうちをおもひこそやれ 初 (238)

一宮小弁

七夕のあまのとわたるかちのはに思ふことこそかけとつきせね 初 (246)

〔源俊賴朝臣 帰るさはあさせもあらし天川あかぬ涙に水しまさらは (177) (この歌、岡田本・園林本・宣秀本・続類従本に無し)〕

藤原朝隆

ひくこまのかけをならへて相坂の関ちを月もこゆる成けり 初 (269)

依月厭雲といふことを

源明実朝臣

さやかなる月をかくせる雲なれは心なき名もたつにやある覧初(273)

八月十五夜の月を

藤原為忠

いつとなくおなし空行月なれとこよひははれよと思ふなるへし初(274)

旅宿月といへることを

藤原有業

たひねする難波の浦のとま屋かたもろともにしもやとる月かな初(276)

摂政左大臣家にて山月といへる事をよめる

藤原親隆

みわの山杉まもりくる影みれは月こそ秋のしるしなりけれ

漢明無雲といへる事を

瞻西上人

天川雲のかけ橋かきたえて谷より月のすみわたるらむ初(291)

皇后宮にて江月といふことを

藤原重基

秋の夜はふけ行空に雲はれて入江におつる山のはの月初(293)

月浮山水といへることを

秋山のし水はくましにこりなはやとれる月のくもりもそする初(295)

摂政左大臣家にて野径月をよめる

源定信

ひるとのみいはれの野への月影は露はかりこそよるとみえけれ初(294)

山階寺の涅槃会に参ての夜勝喜法師に会て夜もすから月をみて

淋賢法し

なからへは思出にせんおもひいてよ君とみかさの山のはの月初(297)

後冷泉院御時殿上人あまたくして月みありきけるをみてよめる

よみ人しらす

うらやまし雲のうへ人うちむれてをのか物とや月をみるらん初(302)

摂政左大臣家にて山月といへることをよめる

藤原時昌

神のすむ三笠の山の月なれはかりそめにゐる雲たにもなし初(303)

藤原季孝

秋ことにこゑもかはらずなくしかはおなし妻をや恋わたる覧初(324)

田家鹿をよめる

藤原宗国

山田もるしつのいほりのあたりにしはより外にくる人もなし初(326)

源俊頼朝臣

さゝかにの糸にかゝれる藤はかまたれをぬしとて人のかるらん

河霧をよめる

紀宗兼

よと川のをち方みえぬ秋霧にともろならして舟くたるなり初(350)

藤原行家朝臣

※河霧の立こめつれは高瀬舟分行さほの音のみそする 初(353)・(256)(園林文庫本による、他岡田本・宣秀本・統類従本にあり)

武蔵国にまかりて二むら山の紅葉をみてよめる

橘能元

いくらとも見えぬもみちの錦かなたれ二むらの山といふ覧初(361)

〔紅葉の心をよめる 藤原伊家 谷川にしからみかけよ竜田ひめ岑のもみちにあらしふくなり (263) (この歌、園林本・岡

田本・宣秀本・続類従本に無し)〕

摂政左大臣家にて落葉をよめる

源俊頼朝臣

あらし山葉守の神もたゝるらん月に紅葉の手向しつれば(園林本による、他岡田本にあり。但し、この歌とやゝ語句を
相違するが、先に両本、月前落葉を 源俊頼朝臣 嵐にや葉守の神のたゝるらん月にもみちの手向しつれば (230) とあり、
重複する。この(230)他四本にもあり)

源淳国

おしめとも野への草木の枯ぬれば露たに秋はとまらさりけり 初(379)

卷四 冬部

時雨を

覚雅法し

秋はてゝとふ人もなき山里に時雨のみこそをとほともなへ 初(392)

千鳥をよめる

神祇伯頭仲

※風はやみとしまかいそをさしまつは夕波千鳥たち鳴也 (289) (園林本による、他岡田本・宣秀本・続類従本にあり)

百首哥中に霜を

源俊頼朝臣

すみよしのちきのかたそきゆきもあはて霜置まとふ冬はきにけり 初(400) (園林本による、他岡田本・宣秀本・続類
従本にあり)

法橋有禪

山川もこほりにけりな岩間よりとろきおつるをとたゆるまで 初(406)

〔氷をよめる 源俊賴朝臣、と詞書・作者名のみ、園林本・岡田本にあり、また伝鳥丸光広本・押小路家旧藏本にもありといふ〕

水鳥をよめる

源家時

あらし吹よはの川なみたかけれはうきねの鷺も夢さめにけり

題不知

源俊賴朝臣

雪ふれは谷のかけ橋うつもれてこそゑそ冬の山ちなりける

冬月宿水といへることをよめる

平実重

谷川にむすふ氷の下に。へこゝろふかくもやとる月かな 初(427)

藤原致時

朝倉のこゑこそ空にきこえけれあまの岩戸を今やあく覧 初(431)

〔氷をよませ給へる 三宮 つなかねとなかれもやらすたかせ舟むすふ氷のとけぬかきりは(316)、この歌・園林本・岡田本に無し〕

十二月廿日比に山家暁といへる心を

春宮大夫公実

山里の竹のすかきしあらければうち外もわかす有明の月初(438)

卷五 賀部

源俊頼朝臣

おちたきつ八十うち川のはやきせに岩こそ波は千世の数かも

〔大藏卿匡房 君か世はかきりもあらし三笠山峯の朝日のさゝんかきりは (346) (この歌、園林本・岡田本・宣秀本・続類徒本に無し)〕

卷六 別離部

〔返し 春宮大夫公実 朝日とも月ともわかすつかのまも君を忘るゝ時しなけれは (370) (この歌、園林本・岡田本に無し)〕

卷八 恋部下

〔摂政左大臣家にて恋歌よみけるに 藤原親隆朝臣 しほたるゝ伊せおのあまの袖たにもほすなるひまはありとこそきけ (この歌、園林本・岡田本・宣秀本・続類徒本に無し)〕

〔題しらす よみ人しらす あふ事は夢はかりにてやみにしをさこそみしかと人にかたるな (474) (この歌、園林本・岡田本に無し)〕

〔物思ひ侍ける比月のあかゝりける夜あかさりし面影つねよりもたへかたうてよめる 橘俊宗女 つれくと思ひそ出る見し人をあかていく月なかめしつらん (494) (この歌、園林本・岡田本・宣秀本・続類徒本に無し)〕

〔題不知 上総侍従 あさましく涙にうかふ我身かな心かろくはおもはさりしを (495) (この歌、園林本・岡田本に無し)〕

〔よみ人しらす うとましや木の下陰のわすれ水いくらの人のかけをみるらむ (531) (この歌、園林本・岡田本に無し)〕

〔恋の歌とてよめる 春宮大夫公実 逢事はふな人よはみこく舟のみおさかのほる心ちこそすれ (544) (この歌、岡田本・園本に無し)〕

〔俊忠卿家にて恋歌十首人くよみけるにおとしめてあはすといへることをよめる あやしきもうれしかりけりおとしむるそのことのはにかゝると思へは (550) (この歌、園林本・岡田本・宣秀本・続類従本に無し)〕

卷九 雑部上

〔山寺に月のあかりける夜経のたうときを聞て涙のおちければよめる 平康定女 いかてかはたもとに月のやとらましひかり待けるなみたならずは (572) (この歌、園林本・岡田本・宣秀本・続類従本に無し)〕

〔石山にまいりけるに大津にとまりて夜ふけてきければ人のけはひあまたしてのゝしりけるを尋ねければあやしのしつめかよねしらせ侍るなりと申けるをきよてよめる 和泉式部 驚のゐる松原いかにさはく覧しらせはうたて里とよみけり (592) (この歌、橋本公夏天文四年筆写本に無し)〕

〔御返し 上東門院御堂女 すきにける月日のほともしられつゝこのみをみるもあはれなるかな (599) (この歌、園林本・岡田本に無し)〕

〔殿上おりたりける比人の殿上しけるをきよてよめる 源行宗朝臣 うらやまし雲のかけ橋たち帰り二たひのほる道をしらはや (606) (この歌、園林本・岡田本に無し)〕

〔殿上ましけるにえせさりければよめる 平忠盛朝臣 思きや雲井の月をよそにみて心のやみにまとふへしとは (607) (この歌、園林本・岡田本に無し)〕

〔皇后宮美濃 よなくはまところまでのみ有明のつきせす物をおもふころかな (621) (この歌、宣秀本・続類従本に無し)〕

〔返し 賀茂成助 住吉のまつかひありて今日よりはなにはの事もしらすはかりそ (630) (この歌、園林本・岡田本・宣秀本・続類従本に無し)〕

卷十 雑部下

〔返し〕 知信朝臣 世継ニハ此贈答相違シタリ 虫の音はこの秋しもそ鳴まざるわかれちとをくなる心ちして (648) (この歌、園林本・岡田本・宣秀本・続類従本に無し) (一)

〔衆罪如霜露といへることをよめる 覺誓法し つみはしも露ものこらすきえぬらんなき夜すからくゆる思ひに (675) (この歌、園林本・岡田本に無し) (一)

龍女成仏をよめる

勝紹〔超〕法師

※わたつ海の底のみくつとみし物をいかてか空の月とみるらむ (679) (宣秀本による、この歌、他に続類従本にあり)

〔醍醐の釈迦会に花のちるをみてよめる 珍海法師母 けふも猶おしみやせまし法のためちらす花そと思ひなさは (687)

(この歌、園林本・岡田本に無し) (一)

〔極楽をおもふといへることを 源師俊朝臣 四方の海の波にたゝよふみくつをものなゝへの網にひきなもらしそ (686) (この歌、宣秀本・続類従本に無し) (一)

扱、右の一覧した結果から、まず、表記の上で「」圈内に別記した歌についてみると、(三)の公夏本に存して、他の五本に未載の歌二十七／＼八首は―相互の間の存否は右の如くであるが―源俊頼歌「時鳥こゑまちつけて……」と、卷八恋下の藤原親隆「しほたるゝ伊せをのあまの……」の僅か二首を除いて実際にはすべて流布本のなかに見出される歌である。而もその一首俊頼歌は公夏筆の一本(天文四年筆写本)だけに欠落する歌である。諸本解題の処で誌したように、公夏両本の親近性から考えて、この欠落は筆者公夏卿の誤脱か或いは何か特別な事情かによるものと思われないのであるから、二首を除きというのは寧ろ一首を除きと云うべきかもしれない。いずれにせよ一・二首を除

いた二十数首は従つて勿論実際には流布本に於て切出された歌とは云い難い。たゞ、公夏本に対しこれだけの異同歌があるのは、さきざき述べてきたように、この系類の段階に於ける切継を示していて、その点、これも各本間の選述過程を示唆するものであらう。

さきの推論に従つて、おおまかに云えば、他四本↓公夏両本↓流布本の過程を想定するのが、最も自然である。これとは反対に公夏本↓他四本↓流布本の経過を仮定するならば、先ず公夏本系に於て、この二十数首が撰入され、他四本系の段階で切出され、再び流布本に於て復活収載されたと考えなくてはならない。草案期に於ける改変としても常識的には、この経過はかなり非理な想定であるのが判然とする。しかし、猶多少の疑点は又ないわけでもない。例えば※印を附記した処の藤原行家の歌「河霧のたちこめつれは……」(256)、神祇伯頭仲の歌「風はやみとしまか磯を……」(289)、勝超法師の歌「わたつみの底のみくつと……」(679)など、前二首は公夏本に欠き四本に存し(行家歌は初度本⁽³⁵³⁾にある)、勝超〔紹〕法師歌は宣秀本・続類従本両本だけにある歌であつて、流布本に於て見出されるのであるから、僅か三首にはすぎないが、この場合などは後者の仮定の方が無理のない経過と考えられるのである。(但し園林本・岡田本にある俊頼歌「あらし山葉守の……」の歌は重複歌であるにつき除く。)しかし、やはり歌数の上の比較からみてもむしろ例外とみるべきであつて、僅か数首の歌が二転三転したと思われるのである。この問題はすでに推論してきたことでもあるように、これは、ともかくも流布本以前の異同であり、ここではそれら各本と流布本との間に於ける相互の関係を参考までに例示し、附言したのである。

それでは、この続群書類従本系類から流布本に至るまでの間に、明らかに切り出された歌と見ることの出来るのは公夏本(無奥書本)にみえる七十首(先の俊頼歌・親隆歌を含む)に、宣秀本・続類従本・園林本・岡田本の四本にある、

忠孝歌「ともしすとあれのゝこまの」、俊頼歌「すみよしのちきのかたそき……」初(400)の僅か二首を加えたものとなる。そのほか、園林本・岡田本にみえる、やはり俊頼歌「あらし山葉守の神も……」の歌は註記した如く、この両本、他四本中にも語句をやや相違するが既出していて、いわば重複歌にすぎないので当然のぞかれるべきである。また、この両本に俊頼歌として「冬月をよめる」と詞書のみあるが、その歌は知るべくもない。従って、かりに之を加えたとしても三首にすぎないわけである。そのほか、公夏本以外に存する歌はすべて二度本の中に見出されるので、この系類から流布本の間に切出された歌は七十二―三首と、これら諸本からは数え出されるのである。そのうちわけは、春部二十二首、夏部十八首(公夏本欠歌一首を加う)、秋部二十二首(但し、さきに挙げた重複歌は除く)、冬部八首(公夏本欠歌一首を加う。ほか園林・岡田本の詞書のみ欠歌を除く)、賀部一首、恋部下一首となる。そして、これらの歌は註記した如く、初度本からの歌が過半数―五十三首―を占め、それに、この系類の段階で撰入された歌十九首となっている。そのなかの一首、俊頼の歌「身にかへておしむにとまる……」は流布本で切棄てた後三奏本に再録している。

又、この切出された歌の分布をみると、恋部の一首を除き、巻五迄の前半部がそのすべてであることは注目される。井上通泰氏が「彼所謂初度本(続類従初度本)ノ他本ト異ルハ賀以上即古写本ノ上巻ニ当レル部ノミニテ別離以下ハ全ク第三種本(所謂二度本中の一)ニ同ジ。恐ラクハ下巻ノ欠ケタリシヲ人アリテ第三種本ニヨリテ続紹セシ」(校訂金葉集緒言)めたと説かれたことが想起される。確かに右の如く巻六以後はただ一首の切棄てた歌があるにすぎないのはその反映であり、一面井上説の可能性を暗示するものかもしれない。が、現存の公夏本系・園林本系或は氏の未見の宣秀本等諸本、皆ほぼ同様な傾向を示しながらも、猶巻六以下に相互かなりの異同歌を散見するなどから、単一に二度本系の粗雑な一本を以て続紹したというような固着した推論をもってしては解き得ない性格を各本が

有しているのである。ただし、この諸本と二度本との間は前半部に比し、異同は甚だしく尠いことは事実であり、その事実を説明する論放も現在、氏の仮説以外に皆無である。又、その論証となるべきものも尠い。

この七十数首は初度本からの歌が過半とはいえ、その作者は殆どが二度本金葉集の作者か、或は詞花集等にみる当代の作者であつて、この期の改訂は初度本のそれとは自づから質的に異なるが、猶続類従本系統の総歌数七百六十数首の約一割に近い歌が棄却されたのであるから、前者につぐ修正が施されたわけである。而もそれが多く当代の作者の歌に於て取捨撰択を行なっているのは、なおも、この期に於ける撰者の迷いや撰集情況の浮動的な側面を我々に知らしめるのである。例えば撰者自らの歌も二十首近くを切出している。この一例からしても、この続群書類従本系統は、既述してきたように、寧ろ二度本精撰本に到達すべき流動的な過程の一草案であることを知らしめているのである。

次に、この続群書類従本系統の途次に於て新たに撰入した歌で、そのまま流布本に引継がれた歌を参考までに一瞥すると、

春部では

修理大夫顯季歌「うちなひき春はきにけり……」(1)、春宮大夫公実歌「春たちてこすゑにきえぬ……」(2)、皇
后宮肥後歌「つらゝあしほそ谷川の……」(4)、前斎宮内侍歌「春のくる夜のまの風の……」(5)、太宰大貳長実歌
「いつしかと春のしるへに……」(6)、藤原顯仲歌「いつしかと明行空の……」(3)、源忠季歌「かきりありてちり
ははつとも……」(21)、大蔵卿匡房歌「春かすみたちかくせとも……」(23)、摂政左大臣歌「峯つゝきにほふさくら

を……」(47)、大中臣公長歌「おのゝえは木のもとにてや……」(54)、藤原忠隆歌「吉野山峯にたなひく……」(53)、中納言雅定歌「ちりはてぬ花のありかを……」(74)、権僧正永縁歌「山里は野へのさわらひ……」(75)、中納言雅定歌「のこりなく暮行春を……」(95)、

の十四首である。

夏部では

大中臣実〔定〕長歌「うのはなの青葉もみえす……」(110)、

の一首。

秋部では

太宰大貳長実歌「まくすはふあたのおほの……」(166)、皇后宮美濃歌「藤はかまはやほころひて……」(167)、内大臣歌「かきりありてわかるゝ時も……」(174)、源俊頼歌「帰るさはあさせもあらし……」(177)(園林・岡田・宣秀・続類従本欠)、皇后宮肥後歌「月をみて思ふこゝろのまゝならは……」(200)、源師俊歌「いかにしてしからみかけん……」(201)、藤原忠隆歌「なかむれはふけ行まゝに……」(213)、源俊頼歌「むら雲や月のくまをは……」(218)、源俊頼歌「あらしをや葉守の神も……」(230)、内大臣家越後歌「夜はににくこゑに心そ……」(237)、皇后宮肥後歌「白露と人はいへとも……」(241)、藤原顕輔歌「しら露やこゝろをく覧……」(246)、源俊頼歌「をとほ山紅葉ちるらし……」(262)、源俊頼歌「あらし山葉守の神の……」(岡田・園林両本にあるも)(230)と同歌につき除く、源師俊歌「草のはにはかなくきゆる……」(272)、春宮大夫公実歌「おしめとも四方の紅葉は……」(273)の十五首である。

冬部では

皇后宮肥後歌「ひおのよる河せにみゆる……」(285)、神祇伯頭仲歌「風はやみとしまかいそを……」(289)(園林・岡田・宣秀・続類従本にあり、公夏岡本欠)、源俊賴歌「衣てのさえ行まゝに……」(307)、皇后宮権大夫師時歌「すみかまにたつ煙さへ……」(309)、藤原兼房歌「かきくらし雨ふるよはや……」(312)、皇后宮権大夫師時歌「神かきの御室の山に……」(315)、前齋院六条歌「中々に霜のうはきを……」(317)、内大臣歌「なにとなく年のくるゝはおしけれど……」(320)、中納言国信歌「なに事をまつとはなしに……」(325)の九首である。

賀部では

源師俊歌「よろつ代とさしてもいはし……」(330)、源俊賴歌「君か代は松のうは葉に……」(332)、源賴家歌「よろつ代のためしとみゆる」(353)、源俊賴歌「くもりなくとよさかのほる……」(354)の四首である。

初奏本が巻五迄の残欠本であるところから、巻六以下については推定すべくもないが、以上この巻までに続群書類従本系諸本に継入した歌六十首(重復歌を除く)のうち過半の四十三首が流布本にと残しとどめられたのである。